
現実世界と並行世界

小来栖 千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界と並行世界

【ISBN】

978-4-903599-1-4

【作者名】

小来栖 千秋

【あらすじ】

「全てを話して、あなたは信じてくれる？」

現実世界と並行世界（リアルワールド パラレルワールド）が存在する世界で、一人の少年が世界の交錯に巻き込まれる。少年が飛ばされた世界は『覚醒者』と呼ばれる人知を超えた力を有している人々が争う世界だった。少年は元の、自分の世界へ帰ることができるのか？

二つ存在する世界の真実は？ 二つの世界を守るために、戦おうとする少年へ逃れられない影が忍び寄る、バトルSFファンタジー。

あなたは、どちらの世界がリアルだと信じますか？

序章　交わりの始まり　+

世界は今を生きている現実だけだと、どうして言えるだろうか。選択を迫られた一点から、それぞれに枝分かれした世界がないとどうして言い切れるだろうか。

そのような世界は存在しえるかも知れない。

それらを確認する術はないが、それらの世界が交われば、それが証拠と成りえるのではないだろうか。

そう思つてしまふのだ。

いつか複数存在する世界が交わる時が来たとして、人間はその世界の存在をどのように捉えるのだろうか。

肯定するだろうか、否定するだろうか。
いや、そもそも共存できるのだろうか。

それらの杞憂はその時が来てみなければ分からぬ。

しかし、人　あるいは世界は寄り添いあって生きていくことが出来ると思うのだ。

序章　交わりの始まり　?

太陽が沈んだ街の夜は数メートル先の世界が分からぬといふほどに暗いことはない。

しかし、どんよりとした厚い雲が空を覆つてゐるため、夜空に輝いてゐるはずの月や数えきれない数の星たちはその姿を隠してゐる。普段はそれらの輝きで夜の街は照らされている。夜の街を照らす街灯の明かりがあるとはいへ、月や星の輝きがないことはどこか心を不安定なものにする。

そのような夜の街には硬質な質感を与えてくる建物が均等な距離を保つて、連続で建てられている。それらの建物を地上から見ると、壯觀であり圧迫感が身体を恐怖させる。

夜の街には人がいる氣配がまるでしない。

建物の窓には明かりが灯つており、わいわいと賑やかな声が今にも聞こえてきそうだが、それらの声も街灯だけが虚しく照らす街の雰囲気にすぐに消されてしまう。

「はあはあ……」

その建物が建ち並ぶ圧迫感が溢れる街を必死に走つてゐる人影がある。人影は、どこまでも続くかのような建物の間を縫つて行く。街の街灯に照らされるその人影はどこかの学校の制服を着ているようで、走つてゐる姿をよく見れば、成人していないうようにも見える。

(まだ追いかけてきているか……)

人影は走りながらも、自身の後ろを振り返る。走っている人影は、誰かに追われているかのように必死だった。

視線を前に戻し、さらに先を急いで、人影は走っている足を止めない。荒い息遣いだけが木霊するのは、現代ではとても考えられない。しかし、実際に周囲からは他に音も聞こえてこず、人影は自分の走る音と呼吸の音だけの街を走っていた。

(出来るだけ遠くへ　　)

その一心で、人影はどこまでも走り続ける。
そこへ、

「いつまで逃げるんだよー、ユウキ　　つ！　　せつせつと観念する
んだな　　つ！！！」

周囲への騒音を顧みない大声が響きわたる。その声はスピーカーを介して、街中に届いているのではないかと思うほどに大きい。

「はあはあ……」

(ち……っ、もう追い付いてきやがった　　-?)

聞こえてきた声は硬質感漂う街を走っている人影　『ユウキ』を追いかけている。ユウキは追つてきている声の主たちから逃げているのだ。

(なんで追つてきなんだよ……　つ！？　たく　　つ-)

ユウキは自身が追われている理由を知らない。思い当たる節はあ

るにはあるが、それを確認している暇はない。

「見つけたぞ　　っ！」

「な……っー？」

一直線に大通りを走っていたユウキに対して、大通りと繋がっている右の道から現れた全身を黒い防護スーツで覆っている追手の男たちがライフルを発砲してくる。いきなりライフルで撃たれるユウキだが、咄嗟に大通りに路上駐車されている自動車の陰に隠れる。

「ぜえぜえ……。くそ　　っ」

（街中で銃連射とか止めろよな……）

そう、見つかると問答無用に銃で狙い撃ちにされるのだ。その度に、ユウキは自動車や建物、街路樹の陰などに隠れている。追われているユウキは発砲音に気付いた誰かが、警察に連絡してくれることを祈っているが、周囲には明かりの点いている窓が見当たらない。周囲の建物がマンションから雑居ビルに変わっていたのだ。

「ち……っ！　周りこめー！」

ユウキが自動車の陰に隠れたところをみた追手の一人は、ついてきている仲間に指示を出す。その指示を聞いた仲間は、迂回して挟み打ちにしようとしているみたいだ。

（向こうは複数か……。正確な数が知りたいな　　。てか、捕まえる気なのか、殺す気なのかも分かんねえ……）

「ただやられるわけにはいかない、か　　っ！」

じつと隠れているユウキはこのままではやられるだけだと判断して、追手の何人かが大きく通りを迂回しているスキを見て、残った追手の男たちに突撃を行つ。

「な……っ！」

（残つた追手は五人　　か！）

自動車の陰からいきなり飛び出してきたユウキを見て、追手の男たちは一瞬ひるむ。その一瞬をユウキは見逃さない。

「ふ……っ！－！
が……っ！－？」

短い呼気を吐いてユウキは追手の男の一人を飛びあがつての回し蹴りで吹き飛ばす。大の大人を吹き飛ばすほどの蹴りの威力はとても成人もしていな少年の力には思えない。

しかし、吹き飛ばされた男が、街路樹にぶつかりそのまま気絶したのを見る限り、ユウキをただの少年と思うことはできなかつた。

「なつ！？　こ、こいつ　　っ！
くそがきがあああああっ！」

仲間がやられたことに激昂した男たちが照準も定めないままライフルを発砲する。

「げつ！？」

近距離で撃たれた弾丸はユウキの急所に狙いが定まつていなかつ

たが、流れ弾がユウキの左肩をかすめる。

「ぐう……」

かすめただけだが、裂けた制服の肩口から血が流れる。その痛みを感じた瞬間にユウキは一度追手の男たちから距離を取る。

(迂回して連中がもう少しで、後ろの通りから出でてくるか……。
さああと片付けないと)

そう焦るユウキだが、実弾を使う相手をさああと片付けることは容易ではない。突撃も追手の一人を倒すことしかできず、すでに一度してしまったためにもう一度突撃を行つてもそれほど効果はないだろう。何よりもカウンターを受けやすくなる。それが拳ではなく銃弾なので、常套手段とするべきではない。

一度距離を取ったユウキを追撃するよつて、追手の男たちは発砲していく。その追撃も、ユウキは通りに面している建物の陰に隠れてやりすごす。これで前方からの銃撃は凌ぐことができるが、後方からは格好的になる。

(さて、どうする)

ほんの一瞬の間に、ユウキは思案を巡らせる。そして、すぐ行動に移す。

「いつまでも隠れてられると思つなよーー！」

ユウキが先ほどまで逃げていた方向である前方からは追手の男が四人いて、建物の陰に隠れているユウキを狙つて何度も銃撃を繰り返している。

さらに追手の男たちのうち数人が、ユウキを挟み打ちにしようと大通りを迂回しているだろう。そちらの数は把握していないユウキだが、そのことは気にも留めていない。

「そんなこと全く思ってねえよ」

追手の男の挑発に乗るよう、ユウキは躊躇なく隠れている建物の陰から出て、一気に大通りに反対車線まで走る。

「逃がすかあ！」

その行動を見た追手の男たちはユウキを逃がさないよう追いかけた。

（やはりついてきた。これで　）

建物の陰から飛び出したユウキは歩道から車道に飛び出し、街路樹を飛び越えて反対車線の歩道まで辿りついた。

「はあはあ……、ぐ　っ！？」

街路樹を飛び越えた後の着地の衝撃で、銃弾がかすめた左肩の傷に痛みが走る。

しかし、その痛みに蹲っている場合ではない。視線を上げたユウキは、目の前にある建物の入り口のガラスを突き破るようにして中に入していく。

「なー？　あ、あいつ　」

追手の男たちは、ユウキが入つていった建物を見て、驚きの表情

を見せる。

その建物は銀行だった。

序章 交わりの始まり ?

銀行の入り口を突き破つて入ったユウキは、明かりが消されてい
る一階の受付を見渡している。無論それは銀行強盗しようとか金庫
を探そうとしているわけではない。

(銀行や金融機関には必ずあるはずだ　っ)

「ユウキが探しているものは別なものである。
目的のものを探そうと本来なら銀行職員が入る受付の奥まで、ユ
ウキは並べられている机を飛び越える。

「どうだ……！？」

躍起になつて探していくところに、

「俺たちを銀行強盗にでも仕立て上げるつもりかあー！？」

追手の男たちが銀行の中へ入つてくる。

(こいつらも躊躇なしか　！…)

銀行のフロア内に現れた追手の男たちを見て、ユウキはすぐに飛
び越えた机の下に隠れる。そのコンマ数秒後に、けたたましい音と
ともにライフルの火がふく。

「ぐそ……っ」

容赦なしの銃撃が銀行のフロア内に響きわたる。その銃弾は銀行の受付内の机や椅子を貫通していき、壁に設置されているロッカーにも穴を開けていく。

(まずいな)

銃撃が止むまで机の下から出られないユウキは、身動きがとれない。このままではじり貧であり、男たちもユウキ同様に机を超えて狙つてくるだろう。

この危機的状況を一発解消するために、ユウキは目的のものを探す。

(ドラマや映画なんかじや、よくこの辺りに)

頼りない知識ではあるが、あてもなく探すよりはマシだろ?とユウキはフロアを区切るように長く設置されている机の下を這つて進みながら探す。這つて進むユウキの後ろには、肩から流れている血の痕が残される。

その間もライフルの発砲音は止まらない。

「……? あいつ移動してるだつ!」

何度も銃撃を行っても反応がないことに気付いた追手の男の一人が、机を飛び越えて銀行の受付内に行こうとする。

(げ……っ、ばれたか)

なるべく物音を立てないように慎重に進んでいたことが逆に男たちに気付かれる要因になってしまった。

(いりなりや やけくそだ)

どちらこしろ追手の男たちも机を飛び越えてくるだらうと判断したコウキは、机の下を這つて進むことを止めて立ち上がる。

「いたぞ つ！！」

当然追手の男たちにはすぐに気付かれるが、コウキは気にしない。立ち上がってそのまま受付の長い机を並走する。そして、机の下に手を当てる、目的のものを手探りで探す。

「待てえ！」

そのコウキのすぐ後ろを、受付の机を飛び越えた追手の男が追いかけている。振り返ってその様子を確認したコウキは、さらに走る速度を上げる。

「くそ、こいつ速い 」

銀行の入り口付近でライフルを構えている男たちは仲間にあたることを考慮して、発砲することが出来ないでいる。

(今 の つ ち に 見 つけ な い と ……)

そう焦るコウキの左手が、机の下の出っ張っている何かとぶつかる。

「……つー？』

それを感じてコウキは立ち止り、急いで机の下を確認する。

(あつた)

そこにはユウキが探していたものがあった。
ユウキが探していたものは、外へ緊急の連絡ができる、ブザーを大音量で鳴らす『非常ボタン』であった。

(金融関係には絶対にあるもんだろ、これ)

目的のものを見つけたユウキは、それに飛びかかるよつにしてボタンを押そうとする。

「……？ な つ！？ やつをとめろっ…。」

それに気付いた追手の男の一人が叫ぶ。

「ち…… つー！」

気付かれたことにユウキは舌打ちをする。その背中に受付の机を飛び越えた男が飛びかかって抑えようとする。

(やば つ)

捕まる。

そうユウキが思った瞬間、銀行のフロア内に強烈な風が銀行の入り口のガラスや窓ガラスを割つて吹き荒れる。

「な…… つー？」

いきなり吹き荒れた強風に追手の男たちは、建物内の壁まで吹き

飛ばされる。ドガツといつ大きな音とともに男たちは壁に衝突し、そのままずるずると床に倒れていく。

「はあはあ……」

(やつとか)

強風に吹き飛ばされて氣を失った男たちをユウキが一瞥している
と、

「ユウキ ！！」

声がかけられる。そちらを振り返ると一人の少女が立っていた。
少女の名前は『ミユキ』。

肩を少し超えるほどに伸びたストレートの髪が驚くほどに綺麗な
黒色で印象的なユウキの幼馴染みである。

「間に合つたみたいだね 」

「ぎりぎりだけどな」

「仕方ないでしょ。連絡きたのお風呂入つてたときだつたんだもん

」

さきほどの強風によつて割れた銀行の入り口のガラスを踏みしめて、少女 ミユキはユウキのもとへ駆け寄つて言つ。その言葉は間違いではなさそうで、タンクトップの上に薄いカーディガンを羽織り、ショートパンツを履いているだけの服装から覗いている肌は少し火照つたような色合いをしている。その彼女は肩に小さなバッグをさげていた。

「なるほどね……」

そのミコキの肌を見て、おもわずコウキは視線を逸らす。

「連絡をくれてからどうだったの？」

「どうも……。喫茶店で別れてから、ずっと追いかけられてるんだよ。もしかしたら、喫茶店から張つてたのかもな」

コウキがミコキに連絡を入れたのはこの逃避行が始まつたすぐであり、もう二〇分以上も前のことだ。その後からの状況をミコキに説明する。

「追つてきてるのが誰か分かつてるの？」

「いや、分からぬ。俺を捕まえようとしているのは分かるが、何が狙いなのかわせっぱりだ」

追われているという現実は変わらないが、その理由はコウキにも分からぬ。

「ともかく、追手きてるはこいつらだけじゃない。さつきスピー
カーでこいつらのボスみたいなやつが叫んでたから、まだ油断は

」

そこに再び声が聞こえてくる。

「その通り。まだお前を捕まえるのは諦めてはおらんぞ？」

それはまたしてもスピークーを介して聞こえた男の声だった。

「……っ！？」

聞こえた声に、ユウキは敏感に反応する。どうやらスピーカーの声の男は、銀行の外からこちらの様子を窺っているようだ。

「やつと出てこい。お前は袋のねずみだぞ？」

スピーカーから聞こえてくる音のほかに、ユウキはエンジン音が紛れていることに気付く。

(車……?)

「どうするの？」

「何が目的かは分からぬが、捕まる気はない。逃げよう！」

「どうやって……！」

銀行の入り口は別の男たちに抑えられているだろう。すぐに突入してこないのは、こちらを警戒しているからだろうか。

「裏口があるはずだ。あいつらを牽制するためだ。もう一発頼むよ、ミコキ！」

「しょうがないなあ、もう！」

ユウキの言葉の意図を理解したミコキは、銀行の入り口へと向こう直る。

その瞬間、またしても強風が起る。その強風は銀行フロア内の机や椅子を持ち上げ、そのままユウキを捕まえようと追っている男たちがいる外へと吹き飛ばす。次の瞬間には、その机や椅子やらが風とともに襲いかかってきたのを見た、男たちの悲鳴が夜の街に響きわたった。

「あ、今のところまだいい。

もういいへ、ミコキは振つ返る。

「あー。

序章 交わりの始まり ?

どれくらい走ったのだろうか、分からなかつた。
気がつけばユウキもミコキも疲労から足を止めて、近くの隠れやすい場所に身を潜めている。

「ち……つ」

「大丈夫？」

肩で息をしながら左肩を押さえているユウキに、ミコキは心配の声をかける。

「ああ……。なんとか　だけどな。今何時だ?」

「え?　日が回って一時過ぎだけど、なんで?」

「夜明けまで耐えればなんとなるかもって思つたんだけどな……」

答えながら、ユウキは周囲へと視線を巡らせる。

追いかけてきていた連中が近くにいなか、と周囲への中注意を怠つていないので。それは、まだ逃げきれていないとユウキが判断していないからだが、ミコキはここまで逃げてこられれば大丈夫だろう、と完全に安心しきつている。

「どうしたの?」

「まだ追いかけてくるかもしれない」

「まさか　つ!?　ここまで来たんだよ?」

先ほどまでの建物ばかりが並んだ街中から、ユウキがいる場所の景色は随分と変わっている。太陽が昇る前ということもあり周囲の

景色をはつきりと認識することはできないが、建物の明かりがないということは市街地を大きく外れているのだろう。必死に逃げてきたユウキは自分がどこに向かつて走っていたのかも分からぬ。

「安心はできないさ。合流するまでに誰か見たか？」

「？ ううと。ユウキと会うまでは人とすれ違つてないけど

「そうか……」

「それがどうかしたの？」

ユウキの質問が何を指しているのか分からぬユウキは、焦ったように尋ねる。

「人払いがされているのかもしぬないってことだよ。最初から向こうの術中にハマってるのかもしぬないな

「そ、そんな…？」

ユウキの推測を聞いて、ミコキは戦慄する。それが当たっているならば、ここは敵の集団のど真ん中ということになりかねない。そうだとしたら、助かる可能性は限りなくゼロになる。

「そうだとしても大丈夫さ。最低でもお前だけは逃がすよ」

「はあ……!? 何言つてんのよ！ 自分が一番危ないっての分かつてるでしょ？ ユウキを置いて逃げるなんて出来るわけないじゃない！…」

声を荒げるミコキ。自己犠牲を厭わない、というユウキの態度に腹が立つたのだ。

ユウキもミコキも危険な状況であることは変わらないが、その度合いはユウキの方がはるかに高い。ここで守られるべきなのはミコキではなくユウキだ、というのがミコキの判断だ。

「女子に守られるってのは男のプライドが許さないんだよ」「そんな問題じゃないでしょ？ 狙われてるのは私じゃなくて、コウキなんだよ！？」ここでコウキに守られて私だけ逃げたら、あなたのお父さんに会わせる顔がないわよ！」

声のボリュームを落とさないミコキは、さらに声を大きくして言う。コウキは、ミコキの言葉の内容よりも、その大きさに驚きを取りもどす。

「もう言つてもうえるのは有難いけどな、もう少し声のトーンを落とせよ」

「え……？」

「ここ」の場所がばれるだろ

そう注意を促すコウキだが、それはもう遅かった。

コウキとミコキが隠れている場所一帯に、急に強烈なライトが当たられる。その眩しきる光を浴びて、

「な、なに……っー？」

「遅かつたか……！」

二人は眩しさに目をくらませるよう、目を細める。

強烈な証明が当てられて、コウキは自身がどこに隠れていたのかをようやく認識する。どうやら、ここは郊外にある公園の一角のようだ。遊歩道の端に設けられている藪の中に、コウキとミコキは隠れていた。その一人の後ろは公園と車道を区切る一メートルほどの中間網しかない。

(後ろに逃げ道はない……か)

それに気付いたコウキは、苦虫を噉むように下唇を噉む。逃げた先を把握しきれなかつたことに対する自分の憤りだ。

そこに、

「そこには隠れているのは分かつてゐる。わざわざと出でてこ。」からも追いかけてこは疲れたのだ

男の声が届いてくる。

その声は先ほどのスピーカーの声の男と同じものだ。そのことに気付くと、コウキは身体を震わせる。

(コウキ……?)

そのコウキの反応を感じて、ミコキは驚く。

その反応はそれまでミコキが見たこともないものだつた。敵を眼前にして身体を震わせるというのは、武者震いしか見たことがない。しかし、このコウキの身体の震えはとてもそれだとは思えない。

「……まだよく追つてくんな！」

強烈な光の先にいるスピーカーの声の男に対して、コウキは言葉をかける。

「いやらとしても、子ども一人にこんな徒労はかけたくないのだがな。」ちらの計画としても、お前が必要なのだよ。すんなりと捕まつてくれないだろうか？」

「は……つー！ そんなのは『ごめんだね』

「やつか……。残念だよ」

コウキの返事を聞いて、スピーカーの声の男は表情は見えないが、残念そうに呟つ。

(そんなことはもう思ってないだろうな)

じつとしているだけではただ的になるだけだと判断したコウキは、じつじりと相手との距離を測りだす。せめてミコキだけでもこの場から逃がさなければ、とコウキは思考を巡らせる。

「残念……？ さんざん俺を追いかけ回しておいて、捕まる気なんてさらさらないのは分かってるだろ？」

「たしかにそうだな、すまない。これ以上の問答は不要とこいつことだな？」

「いや、一つ聞かせてくれ。お前たちは、なぜ俺を狙う？ 僕が必要と言つたが、何が目的だ？ 何か計画でもあるのか？」

コウキは話を引きのばさうとする。

それはミコキをこの場から逃がす方法を考えるとともに、自分自身が狙われている理由を探るためだ。

(敵の数が正確に分からない……。武器もマシンガンだけってことはないだろうな)

次第に田が慣れてきたとはいえ、依然としてコウキたちが隠れている一帯を照らすように強烈な証明が点けられている。その光のせいで、向こうの正確な位置が把握できなかった。

「田的はもういるあるわ。しかし、それをここで話す必要はないな。お前を捕まえてから、話せば事足りることだ。今のお前が気にすることじやないわ」

「そう言わても気になるものは仕方ないだろう? 理不尽に捕まるのは嫌なんですね。そっちが話す気がないのなら、俺も絶対に捕まる気はないぞ?」

(何かは分からぬが、目的はあるつてことか……。まあ、親父関連だうな)

スピーカーの声の男の話を聞いて、そうユウキは判断する。
それに間違いはないだろう。ユウキには、これまでに執拗に追いかけ回される覚えがそれ以外に思い付かなかつた。

ユウキの父親は國家企業に属し、ある研究を行つてゐる。子どもであるユウキはそれだけしか知らないが、何度も父親が自身の研究成果を家に持つて帰つてきているのを見たことがある。ユウキは恐らくそれに関することだう、と判断する。

(だとして、俺を捕まえることで何がしたい……? 何が目的だ?)

ユウキの父親の研究成果はかなり特殊なものであり、その内容を知つてゐる人物も限られてくる。今、ユウキと相対してゐる男がそれを知つていてるとしたら、かなり政府に近しい連中ということになる。

ユウキの返事を聞いて、スピーカーの声の男は光の先で強く頷く。

「なるほど、それはたしかにそうだな。では、強硬手段に移させてもらおうか つー!」

「……つー?」

(まづい……つー!)

一拍遅れて反応したユウキは隠れていた藪の中から飛び出して、

隣にいるミコキを地面へと強引に伏せさせる。

「な、なに　つー？」

「オオオオオオオオオオオオッ！…！」

と、ミコキが声を上げた瞬間に炎が一人の頭上を通過する。こきなりの「」とに驚いたミコキは、

「あや　……！」

と叫ぼうとするが、寸前のところでコウキの手がそれを止める。今叫ばれたら、二人の位置を完璧に相手に知られてしまうところだった。

（火炎放射　　。とんでもない銃火器を持ってきたもんだな……）

放された炎の行方を視界の端で追って、コウキは感想を漏らす。火炎放射器など生きているうちに、生でお皿にかかるものではない。そのことに単純に感動しているのだ。

しかし、頭の隅では別のこととも考える。

（捕まえる、と言つておきながら、一帯を焼き掃おうとする行為……。これくらいじゃ死なないって「」とも織り込み済みか　？）

「むう、ひひひ……！」

そのコウキの下で、口を手で覆われてこるミコキがもうじと何

か言葉を発しようとしました。

「……？　あ、ああ悪い　」

『氣付いたゴウキせ、』『ゴキの口から手を離す。

「ちょっと　ー　死ぬかと思つたじゃんーー」

「悪かつたつて　。ナビ、あそいど思はばれたひ一発でいつの纏
れてるところがばれるだろっ。」

冷静に指摘するゴウキだが、余話している時などで大体ばれてる感じ
よ、ヒミコキは思ひ。それは口にせず、『ゴキせゴウキの顔を
なるべく直視しない』ように小さくへ

「それはいいから……、せ、ゆつこいでしょ　」

「……？」

『ゴキの言いたい』ことがわからず、ゴウキは困惑する。すると、

「だから……、ー　こい加減どこてよ　」

『ゴキの言葉で、ずっと』『ゴキの上に覆いかぶさるのよつこして身
体を伏せた』ことに『氣付くべ。

「あ、ああ　。悪い　」

慌てて、ゴウキせ『ゴキの上から身体を伏かせる。やつと身体の
皿田を得た』『ゴキせ、

「重かつたじやない　」

と覆いかぶさっていたユウキに対して声を荒げる。

「だから、悪かつたって謝ってるだろ。それに今はそれどじりじゃないから、文句は後で聞くよ」

「それどじりじゃないって……」

わなわなと身体を震わせるユウキの頬は少し赤く染まっていた。ユウキの淡泊な言葉が瘤に障つたようで、さらに声を荒げようとするが、

「来るぞ」

ユウキの声で冷静さを取り戻す。

「……っ！？」

ユウキの言葉通りに、照明の光の先から数人の男が両手を広げて襲いかかってくる。その手には鋭利な刃物が握られている。

（今度は斬りつける気か？ やり方をやたら変えるな……）

敵が視界に入ると、ユウキは隠れていた藪の中から飛び出して、襲いかかってきている男の一人へ強烈な回し蹴りを放つ。

「ぐ……っ！？」

急に現れたユウキの蹴りを男の一人は受けとめることも出来ずに、まともにくらう。蹴りをくらった男はそのまま数メートルも吹き飛ばされる。

(まず一人)

敵の総数が分からぬ以上、一人を倒したところで安心することはできない。襲いかかってきている男の数、さきほどの会話の相手、照明を点けている人物、最低限のそれらを足しても一〇人近くはいるだろうとコウキは推測していた。

「こいつ……！」

姿を見せたユウキに、さらに男が右手に持った刃物を袈裟斬りに振りかかってくる。強い逆光の中、寸前のところでコウキはそれをかわす。

「な……っ！？」

(予備動作が大きい。戦闘のプロではないのか　　?)

斬りかかる前の動作が大きいことに、ユウキは相手への疑問を感じる。それを今結論づけている場合ではないので、ユウキはかわた後の一拍で相手の鳩尾に後ろ回し蹴りを見舞う。

「があああああっ！……」

鳩尾を蹴られた男は呼吸が止まる一瞬の間に、仰け反るように吹き飛ぶ。

(これまで二人)

「ミコキ、そこから出るなよ！」

さきほどまで隠れていた藪に背を向けて、ユウキはミコキが参戦しないようにクギを刺す。しかし、それは遅かった。

「はあ！？ ユウキだけに戦わせてらんないわよ」

振り返れば、ミコキはすでに藪から出ていて、ユウキのすぐ後ろに立っていた。

「……はあ 、お前ってやつは……」

分かり切っていたことだが、ミコキは守られているだけで満足する性格ではない。あくまでも狙われているのはユウキであり、ユウキを自分が守らなければ、と思っているのだろう。

思い出すようにミコキの性格を再認識したユウキは、ため息を吐く。

「出できた以上は仕方ない。半分は任せたぞ？」

「分かつてるわよ！」

「なに、くつちゃべってんだよ つー！」

話している途中に、言葉の荒い男が先頭に数人の男がさらに迫ってくる。その形相はとてもユウキを捕まえようとしているものには思えないが、だからといって怖気づいているわけにはいかない。

次々に襲いかかってくる男たちを、ユウキとミコキはひらりとかわし、なぎ倒していく。

「相手の数は目星がついてるの？」

「正確じやないが、一人程度はいるだろう。一人でも取り逃がせば、また追われる。ここで全員叩くぞ！」

「わかつてる　っ！」

お互に声を掛け合つコウキとミコキは、それぞれが向かってく
る男を素手で倒していく。一人の力はとても年齢相応のものには思
えない。

「……子どもの力ではないな」

（もしやとは思つていたが、この一人も　）

「コウキとミコキの戦いぶりを照明がある位置から見ているスピー
カーの声の男は、コウキとミコキがただの子どもではないと判断す
る。

「」のままではやられるのはこちら側だな。もう一度用意を
「はつ…」

突撃させている男たちに刃物を持たせている時点で、無傷で捕え
ることに執着していないスピーカーの声の男は、先ほど使用した火
炎放射器を再度準備させる。その火炎放射器はスピーカーの声の男
の隣に配置されており、砲口がドラム缶ほどの大きさもある。個人
で使用するようなちやちな火炎放射器ではなかつた。

「これで手傷でも負わせられればいいのだが　」

まだ突撃させた仲間が戦つていても気にせずに、スピーカーの
声の男は悠然と咳く。そこに、仲間への心配など微塵もない。ある
のは、目的の遂行のみだ。

一方で、

「ち……つー」

(粘るな……)

数人を気絶させたところまでは良かったが、残った男たちが持っていた刃物を捨て拳銃を取り出すと形勢は逆転した。素手で男たちをなぎ倒したコウキとミコキも、拳銃相手にまともに飛びかかることはしない。身体を弾丸が貫けば、それは致命傷になりえるからだ。

「どうすんのよ　？」

相手が拳銃を取り出したところで、コウキとミコキは一回戻のそばに林立されている木の陰に隠れることにしていた。

「どうするもなにも……。銃相手に正面から突っかかるのは自殺行為だろ。俺はともかくミコキじゃ危険だ」

「でも、ずっとここに隠れてるわけにもいかないわよ！？」

「それもわかつてゐる　！」

ミコキの言う通り、じつと木の陰に隠れていてもいざれば捕まるだろう。後ろには逃げる道もなく、この状況を開けるにはやはり相手を沈黙させるしかない。

男たちは依然として見境なく銃を乱射していく。弾の装填がなくなるのを待つのも一つの手かと考えるが、そこは交代で撃つてきているだろ？ その銃の発砲音とミコキの言葉がコウキの焦りを増させ、最良の判断ができない。

(どうする……どうすればいい……つーー)

「コウキにとつて最も大事なのは、ミコキの安全だ。しかし、藪の中に隠れていたミコキも出てきたことで、それはすでに叶わないと言える。ならば、次に取るべき手段は狙つてくる敵の殲滅だが、それも劣勢に立たされた状況では見込めない。」

(時間をかければ、もっと追い詰められる……)

銃声は止まず、隠れている木に銃弾が当たつていき、剥がれた木片がけたましい音とともに飛び散る。

「コウキ……っ！」

別の木の陰に隠れているミコキが、切羽詰まつたよつて声をかけてくる。

(……くわ　　っー)

「俺が突つ込む！　ミコキは援護してくれ……っ！」

これ以上考えている時間はない、とでも言つよつてコウキは大きな声を上げる。それを聞いてミコキは、

「それしか方法がないだろ！　合図するからな　　っ！」

「え、ちょ……っー？」

驚いた表情を見せるミコキに、コウキは視線を向ける。その目を見て、コウキは本気だと判断したミコキは覚悟を決める。

「一発で決めてよね」

「わかつてるよ。いくぞ　　っ！」

コウキは相手の銃声が止む瞬間を待つ。交代で攻撃をしているのなら、スキをつくにはその一瞬しかない。タイミングを間違えれば、真正面から銃弾を浴びることになる。その緊張感からか、コウキは深く深呼吸を行う。

(大丈夫、大丈夫……。できるはず)

そう強く自分へ念じて、コウキは隠れていた木の陰から飛び出す。

「……っ！？」

急に飛び出してきたコウキに驚いた男たちは、改めて銃口をコウキへと向け直す。その一瞬をコウキは見逃さない。

「今だ　　っ！！！」

まだ木の陰に隠れているコキに聞こえるように、コウキは大声で合図を送る。

「わかった　　！！」

コウキの合図を聞いたコキも木の陰から飛び出し、右手を開いて真っ直ぐコウキの背中へと差し出すように向ける。

「女も出てきたぞ！」

コウキに次いで飛び出したコキに気が付いた男の一人が、コキにも拳銃の銃口を向ける。しかし、それよりも早くコキは行動を起こす。

「はああっーー！」

短い掛け声とともに、ユウキは全神経を開いた右手へと集中させる。

「……っーー？」

すると、その右手から強烈な突風が生み出される。

その突風はビュウウウウウッというけたたましい空気を切り裂く音を響かせながら、真っ直ぐ先にいるユウキの背中へ直撃する。

「……っーー」

その突風を受けたユウキの身体は風の力でふわりと浮きあがり、走るよりも速くユウキの身体を男たちへと吹き飛ばす。

「な……に っーー」

風の全身に受けたユウキの突撃に気付いた男が驚いた声を上げるが、その時にはユウキは男の眼前へと迫っていた。

「……ーー？」

「おらああああッーー！」

強風を全身に受けたユウキの攻撃は、さらに威力を増して重いものになる。それを男はかわすことも出来ず顔面に受ける。

「があああああああ っーー」

ユウキの攻撃を受けた男は為す術もなく吹き飛ばされていく。

「ち……つ！　じいつ　」

味方の男が吹き飛ばされたのを見て、別の男がユウキへ牙をむく。すぐに拳銃を発砲するが、銃口を向けている間にユウキの姿がいなくなっていた。

「な……つー？」

「後ろだよ　」

驚いている男に、ユウキは声をかける。その声を聞いた男が振り向く瞬間を狙って、回し蹴りを見舞う。

「ぐ……つー！」

ユウキの回し蹴りを受けた男は、頭を強く揺さぶられその場に倒れる。一蹴りだけで大の男をノックアウトしたのだ。

「はあはあ……」

ミコキが放つた強風を受けたユウキも身体にダメージがないわけではない。強い風圧を伴う風は身体を襲う凶器にもなる。その風を受けたユウキは身体が軋んでいる。

「身体がギシギシ言つてやがる　」

（もう一度同じ手を使うのは無理か……）

悲鳴を上げている身体を庇つゝ、ユウキは脇腹に手を当てている

「一度引け　　つ」

男が一人も簡単にやられたことを見て、スピーカーの声の男が命令を下す。その声を聞いた残りの男たちは、一度ユウキたちから距離を取つて様子を見る。

「……？」

その行動を不思議に思ったユウキは、いつでも相手の攻撃をかわせるように身構える。しかし、その攻撃はユウキの予想をはるかに超える範囲で迫つてくる。

「全部まとめて燃えちまえ　　！－！」

「げ……！－？」

「ゴオオオオオオオオオオオオオ」という地響きのような音を放ちながら、再び火炎放射器が火を吹く。

予想の範囲を超えた攻撃だつたため、ユウキの反応が一瞬遅れる。その一瞬で火炎の塊はものすごい速度で迫る。反応が遅れたユウキはかわすことができない。

「ユウキ　　つ－！」

身体が動かないでいるユウキに、ミコキが後ろから大声をかける。

「は　　つ－！」

その声を聞いて、ユウキの意識が火炎の塊から外まで広がる。

視界が広がったユウキは、迫る火炎を寸前のところで回避する。その回避の方法に、スピーカーの声の男は驚愕する。

「な……！？ なんだ、いまの ？」

ユウキの回避行動は、迫る火炎を横に走つてかわすというものではなく、その場から消えるように、一瞬の間に別の場所に立つているというものだった。

（やはり、この二人は『覚醒者』）

その回避行動を見て、スピーカーの声の男は自身の予想を確信させる。

「もう一度放射の準備を。今の動きを見れば、やつらが炎程度で死なないのが分かつただろう！」

その確信を得て、スピーカーの声の男はさらに火炎放射を再度行うよう命令を出す。その目には強い愉しみの色があった。

「ユウキっ！」

「大丈夫だ！ それより、あの火炎放射器なんとか出来ねえか！？」
「まともにぶつかつたって鉄の塊壊すことなんてできないよ……っ！」

火炎放射器がある限り、不用意に相手に近づくことができない。逃げ切ることよりも相手を沈黙させることを優先しようと考えたユウキはまず火炎放射器の無力化を狙うが、そう簡単に壊せれる代物ではない。

(やつぱりか……。どうすれば)

「」は郊外にあるそれなりの大きさの公園だが、入り口は先ほどからコウキを捕まえようと躍起になつてゐる男たちの後ろにあり、コウキたちの後ろは一メートルを超える金網が公園全体を囲つている。金網を超えることもできるだろうが、その間に狙われたら意味がない。

コウキがどう突破するかを考えていると、火炎放射器の準備が整う前に男たちがコウキを捕まえようと再度突撃をしかけてくる。

「危ない　っ！」

コウキがまた狙われているのを見て、ミコキも公園内の繁みから飛び出す。

「ば、馬鹿　」

飛び出してきたミコキを見て、コウキは大声をあげる。ミコキまで出できたら、一人とも格好の的になつてしまふのだ。当然突撃しきてきている男たちも、ミコキも標的として飛びかかる。

「こんなやつらなんかに、やられるかああ……」

「ぐわあああ　っ」

「がああ……っ」

飛びかかってきている男一人もカウンターでなぎ倒すミコキを見て、コウキは恐ろしさで背中を震わせるが、一息をついている場合ではない。

「お前まで飛び出してきてどうすんだよ！？」

「だつて、コウキが危なそうだつたから……」

「ち……つ！　こいつら　」

「それなら陰から援護してくれりやよかつたのに　」

「い、今さらそんな」と言つても仕方ないでしょ…」

「コウキとミコキは会話をしながら、捕まえようと迫つてくる男たちの手をかいくぐり倒していく。

（生身の人間じや歯が立たないか……）

その様子を火炎放射器の隣でじつと見つめているスピーカーの声の男は、部下である男たちがやられていく姿を見ても動じない。

「準備はまだか？」

「あと一〇秒ほどでできます」

「よし、あいつらが手こずつている間に焼き切るぞ」

「仲間も被害に遭いますが……？」

「だからこそ、だよ。コウキがこちらに意識を向けていないうちに放つのだ。やられる味方は私は知らない。全ては計画のためだろ？」

「は、は　つ！」

スピーカーの声の男は非情な命令を下すが、それは自身に課せられていてる命令を遂行するためであり、計画のためだ。命令を受けた男も一瞬躊躇するが、その真意を悟つたかのように仲間を見殺しにする決断をする。

その遠くでコウキは打開策をひらめていた。

「そうだ、さつきの風で火炎放射器を吹き飛ばすことは？」

「んー…あの鉄の塊がどれくらいの質量なのか分からぬからなん

とも 「

ユウキの提案も//ユキは渋い表情で返す。

「そうか……」

「……けど、やってみる価値はあるかもね つ

突撃をしてきた男たちを全員沈黙させたユウキと//ユキは、公園の中央に陣取つている火炎放射器を睨む。その砲口はまたしても火炎放射のために、準備をしているのだろう。

「こっちも時間がかかるから、その間まかせたわよーー」

「あ、ああ 」

強気なミユキの言葉を聞いて、ユウキも改めて相手を見据える。そして、今度はユウキの方から相手に向けて突撃を行う。

「考えもなしに真正面から突っ込むか 。青いなーー」

ユウキの突撃を見てスピーカーの声の男は鼻で笑うが、ユウキには聞こえていないだろう。余裕の表情のスピーカーの声の男を見て、さらに突撃の速度を上げる。

(その鼻つ面をへし折つてやるー)

「準備いいよ、ユウキ つ

「用意整いましたーー」

そこに、それぞれ準備完了の声が届く。

「放てーー」

「俺」とやれっ

それを聞いてユウキとスピーカーの声の男が同時に声を上げる。その指示を受けたミコキの手から再び強烈な風が生み出され、火炎放射器の砲口の奥が凄まじい熱を帯びていく。その間もユウキは相手との距離を詰め、火炎放射が放たれないように砲手へと突撃をかける。

「ユウキを放射線上にもつていけ！」

突撃の方向を見て、ユウキの狙いに気付いたスピーカーの声の男は近くにいる部下の男に命令を出す。命令を受けた男はライフルを構えながら、ユウキの突撃を止めるために前に出る。

(な……つー?)

突然前に出てきた男の動きに、ユウキは戸惑ってしまう。常人の走りを超える速度で走っているユウキは、途中で止まることや角度を変えることはできない。このままでは、そのままぶつかるしかなく、さらに男はライフルを構えているためカウンターで撃たれる可能性もある。

近距離の銃撃すでに左肩を銃弾がかすめているユウキの心に、その恐怖が再度湧き上がる。

「そこ」で飛んでつー!」

ユウキのその一瞬の躊躇いを見たミコキが、後ろから叫ぶ。

「……つー?」

ミコキの声を聞いて、ユウキはその場でジャンプする。そこに、

「いっけええええええ　つーーー！」

ミコキが放つた強烈な風が火炎放射器へ向けて、一直線に放たれる。それとほぼ同時に火炎放射器の砲口から一際大きな火炎の塊が放たれようとする。

しかし、それよりも先に強風が公園を分断するように吹き通る。その風は砂塵を捲き起こし、ジャンプしたユウキやスピーカーの男、さらにはその部下である男たちも巻き込んでいく。

ビュウウウウウウウウツというけたたましい強風特有の音が公園内に響きわたり、火炎放射器の火炎が放射される直前に、火炎放射器そのものを持ち上げている。

「な……つー？」

その光景を見て強風にもまれているスピーカーの声の男は驚愕の声を漏らし、砲口が持ち上がった火炎放射器から放たれた火炎が空中へとジャンプしていたユウキへと向けられ、火炎が放たれる。

ゴオオオオオオオオオオオオツー！！！

という周囲の空気が焦げるような音と匂いを撒き散らし、火炎はユウキへと一直線に飛んでくる。

「う、うそだー……」

ユウキが次の言葉を言つ前に、ユウキの身体が火炎と衝突する。

「があああああーー！」

その火炎を受けたユウキの背中にさらに強風が吹き荒れ、火炎と

ともにユウキも吹き飛ばしていく。そして、次の瞬間、公園内に大爆発が引き起こされる。

「ユウキい　　っー！」

郊外の公園内に響きわたる爆発音とともに、ミコキの叫び声が響く。

しかし、引き起こされた爆発のけたたましい音とまき上がった粉塵に、その声も搔き消されていく。火炎とともに強風に飛ばされたユウキは、公園内のどこかに吹き飛ばされたのだろう。ユウキを捕まえようとしていた男たちも同様でそれがミコキの放つた風に巻き込まれ、ばらばらに倒れている。

夜はまだ更けたばかりで、これからさらに暗闇の世界が広がっていく。

しかし郊外にあるこの公園では、昼かと紛つほどどの明るさを放ちながら、公園内の木々が火炎に飲みこまれ、爆発音が周囲の住民を起こしかねないほどにけたたましく響き、撒き上がる粉塵が夜空を雲よりも厚く隠していく。

まだ、夜は更けたばかりだ。

序章　交わりの始まり　?

夜空に吸い込まれるように、黒煙が空高く上つていいく。ついで焼けるような匂いが、辺りに充満している。

それらは、先ほどの爆発によるものだ。

地面が大きく揺らぐほどの爆発は巻き上げられた粉塵と火炎の衝突によつて、引き起こされた。いや、強烈な風とともに巻きあがつた粉塵が火炎放射器を飲み込み、無理矢理放射された火炎が火炎放射器の内部爆発を引き起こした、と言うのが正確だろうか。

どちらにせよ、公園の一帯が爆発の影響で悲惨な状況と化していった。

「……逃げられたか」

その状況を眺めながら、スピーカーの声の男はぼつりと呟く。
先ほどまで捕まえようと必死に追つていたコウキの姿はすでにない。一緒にいた少女　ミコキと呼んでいた　とともに、どこかへ消え去つたのだろう。

「も、申し訳ありません。私のせいです」

そこに、捕まえ切れなかつた男が謝りに来る。

「いや、仕方ないさ。向こうが『覚醒者』と分かつただけでも上出来だ。これでさらに対策が練れる」

ユウキを捕まえ切れなかつたことに、スピーカーの声の男はそれほど悔しさを見せない。悲惨な状況へと変化した公園の中で、スピ

－カ－の声の男はおもむろにタバコを吸い始める。

「『覚醒者』、ですか……」

『覚醒者』という単語を聞いて、謝りに来た男は声を震わせる。その男の震えを感じてスピーカーの声の男は、

「そうと知つていれば、対処することにはそれほど困らん。むしろ我々の計画への必要性がより高まつたというだけだ」

震え上がる男をよそにして、スピーカーの声の男はニヤリと笑みを浮かべる。それには自身の見立てが間違いではなかつたことへの嬉しさが滲み出でている。その笑みを見て、男はさらに震え上がる。『覚醒者』に立ち向かうことに恐怖よりも嬉しさを覚えている、といつた表情は見る側には獲物を狩る獰猛な肉食獣にしか見えない。

「では――」

「無論だ。奴らはそれほど遠くへは行つていらないだろう。すぐに追いかけるぞ」

「はっ！」

スピーカーの声の男は、依然として残り火が燃える公園の後にして、ユウキたちを再度追いかける。

街灯の明かりが点々と夜の街を照らしている。

その明かりに沿つように、ぽつぽつと地面に血痕が残されている。

血痕はコウキのものだ。

「はあはあ……」

夜の街を歩いているコウキは爆発の影響で腹部に傷を負い、ミコキの肩を借りてなんとか歩いている状態だった。

「くそ……っ」

そのミコキは額に汗をにじませながら、先ほどの男たちから一歩でも逃げようと必死に歩いている。しかし、その肩にはコウキの手が回されていて、とても重そうだ。

「無理するな……。俺を置いて行けばいい」

ミコキを中心とするコウキの声はとても小さかった。

「はあ……！？ 何、馬鹿なこと、言つてんのよ。ここでコウキを置いて私だけ逃げたら、身体を張った意味がなくなるでしょ。それに、コウキも、あいつらなんかには渡さない つー」

途切れ途切れの言葉にも、強烈な意志が込められてくる。ミコキの意思是最初から変わっていない。コウキを決して狙つてくる奴らには渡さない、というその一心でここまで身体を張っている。それはコウキの、コウキへの恋心と重なっている。

「けど、ミコキまで捕まつたら元も子もないだろ……」

「そんなへマはしないよ。私も、コウキもあいつらとは捕まらない。捕まえさせない」

力強い言葉とともに、ミコキは一步ずつ前へと進む。立ち止まることは、それだけ相手との距離が開かないということだ。

ミコキが歩いている場所は、住宅街の中のようだ。周囲には一軒家がずらつと並んでおり、物静かな様子は、硬質感が漂う建造物ばかりの市街地よりも増しているようだ。

それらの住宅すでに明かりが消されており、静まり返った夜の街を象徴してこる。

「はあはあ……」

その夜の住宅街に、ミコキの息遣いが響き渡る。

「だから、無理すんなって　」

ミコキの肩に手を回して身体を預けるようにして歩いているコウキは、ぽつりと声をかける。その声色は依然として弱弱しい。

「それはコウキも同じよ。何も自分だけを犠牲にしなくてもいいじゃない……」

「俺自身に関わることだ。お前を巻き込みたくないんだよ」

「今さら何言ってんのよ。私が自分から首を突っ込んだことだもん。途中で投げ出すなんてしたくないの」

「コウキの本音を聞いても、ミコキは引き下がらない」としない。

(やうよ。私が好きで飛び込んで行つたんだもん)

自分の意思を確認したミコキの決意は固い。それを止める術を、コウキは知らなかつた。

足を休めずに歩くミコキの呼吸は次第に荒くなつていぐ。すでに

「一分近くは歩いたはずだが、皮膚を伝う緊張感は未だに解けない。まだ先ほどの奴らが近くにいることを、その本能が知らせているのだ。その緊張感のまま、//コキは住宅街の十字路へとしかかる。

それを証明するかのように、夜の帳が降りていてる住宅街に無数の走る足音が響きわたっている。こんな時間に足音が響きわたること 자체が異常と言えるだろうが、聞こえてくる足音は次第にはつきりと聞こえてくる。

(追いついて来たのかな……)

聞こえてくる足音//コキは耳をすまして集中する。

田の前の十字路のどこから聞こえてくるのかを判断しようとしているのだが、コウキや自身の呼吸音、肌を刺すような緊張感が集中力を鈍らせる。

「足音は間違いない奴らだな」

もつと意思を集中させようと//コキが頭を振つていて、コウキが小さく言つ。どうやらコウキも気付いたようだ。

「どうしよう……？」

「戻る返るのがベストかもしれないな。けど俺の血が地面には垂れてる。先回りされたのかもしれない……」

そう推測するコウキは渋い表情をしている。自分の不注意が招いた結果だと考へ、自身に対して憤つているのだろうか。

「そんな……。ばれないように住宅街を縫つよつとして歩いてたのに

「それでも相手の数と速さには敵わないわ。爆発が起きた前の時点

で、まだ八人は生きてたんだからな

「そんな数くらいなら、私でも十分倒せるよ？」

「ユウキは住宅の塀に寄り掛かるようにして、少し足を止める。その身体を相変わらず支えているミコキの息は上がりっぱなしだ。そのような状態でも、ミコキは大の大人八人を倒せると断言する。その発言は間違いではないだろう。先ほどのミコキの戦いつぶりはとても少女のようではなかつた。さらに、数人の男に囲まれても軽々といなしていたのだ。八人ならまだ許容範囲であるのだろう。

「相手が単純ならそれでいいかもしないが、八人全員で迫つてくるわけでもないだろう。分散してくるだろうし、何より応援が来てるかもしね。相手の素情が分からんんだ。あらゆる可能性を考えるべきだろ？」

追つてきている敵全員を倒そうといきり立つてゐるミコキに、ユウキは冷静な言葉を掛ける。腹部を押さえているユウキの左手は真っ赤に染まつっていた。

「そりかもしねけど……。」そのまま捕まるのだけは避けないと

「それは分かつてゐる

周囲への注意を怠らずに、ユウキは思考を巡らせる。傷を負つた状態でなければ、逃げることは軽々と出来たかもしれない。今さら嘆いても仕方ないことだが、そう考えられずにはいられなかつた。足音はだんだんと大きくなり、それに次いで会話も聞こえてくる。

(すぐそこまで來てるな……)

そう判断したユウキは、ミコキとともに住宅街に設けられているごみ収集場の陰にひとまず隠れる。

「そつちでよ?」

「いなかつた。血痕はこの先にはない。やはり引き返したんじゃないのか?」

「そのはずはない。そのまま血痕を追っている味方とやがて会ったが、発見していないと報告してきた」

「じゃあ」

「この住宅街にまだいるってことだ。それほど大きい住宅街じゃないんだ。各ブロックごとにあれば、すぐに見つかるわ」

聞こえてきた声は次第に小さくなり、足音もそのまま通り過ぎていいく。

(そのまま突っ切つていったのか ?)

会話の声や足音が聞こえなくなつたことに、ユウキは不信感を露わにする。間違いなくこっちに向かつてきていた声や足音はぴたりと止んだ。

「どうしたのかな……?」

隣にこるミコキも不思議そうに囁く。

「十字路を突つ切つたんだろうな。恐らく俺の血痕は気にせず、先回りを命令された連中なんだ」

ということは後ろから追つてきている奴らもいる、ということだ。そして、それは聞こえてきた会話の内容からも間違いないだ。

「そんな ！？」

「まあ向ひのひとつめや、それが一番の手だろ」

「どうじみつ……」

一人の声が止まる。

前に進めば、先ほどの連中とぶつかるかもしない。引き返せば、追つてきている連中とぶつかるかもしない。正面衝突をして負けるとユウキは考えていなが、今の目的は追つてきている奴らを倒すことではなく、捕まらないように逃げることだ。

その目的を達するには、ユウキが負っている傷はあまりにも重い。出血はハンカチを破いて止血したが、失った血の量はとても多い。立っているだけでもユウキには苦痛な状態だろう。

「……」

(どうすれば)

「……」

(私だけでも敵を倒す自信はある。ナビ、その間にユウキが捕まつたら元も子もない。もつこいつなつたら)

ユウキもユウキも声を発しない。再び静まり返った住宅街に、二人の息遣いだけが虚しく響く。

しかし、この場にじつとしていることはできない。後ろから男たちが追いかけてきていることは間違いないのだ。

「ね、ねえ、ユウキ 」

意を決したように、ミコキが口を開く。

「……？ どうした？」

「ここで捕まるのだけは避けないといけないよね……？」

「？ ここまで来たら、な」

そのコウキの言葉を聞いて、ミコキは肩にかけていたバッグから手鏡ほどのサイズの丸い円盤型の機械を取りだす。

「お、おーー それは つー？」

手のひらに収まるサイズのその機械を見て、コウキは目を見開いて驚く。

その円盤型の機械は、少し丸みを帯びた淵から中央のボタンのような仕掛けまで、全てが鈍い銀色を発している。パッと見ただけではどのような機械かも分からぬが、それを一番間近で見てきたコウキには一瞬で分かった。

「うん。何かあつた時に役に立つかなって持ってきてたの」「それを使うっていうのか！？」

「ユウキが捕まらないで済む一番の方法 そうでしょ？」

「そうかもしれないが……っ！ それはまだ 」

「そもそも言つてられないでしょ？ いつもしてると、あの男たちが追いかけてくるなら、こうすることが一番だと私は思うの」

そう言つたミコキはコウキの同意も得ずに、円盤型の機械の中央にあるボタンを押して、機械をそばにある住宅の壆に押しつける。すると、円盤型の機械は眩しいほど強烈な光を放ちながら、丸みを帯びた淵が円状に広がっていく。

「……つー?」

あまりの眩しさで、コウキも//コキも手で光を塞ぎたくなるほどに円を細める。

淵が広がりるとその眩しさは次第に弱まっていき、そのうちまた元の鈍い銀色の光沢だけが残る。しかし、円状に広がった淵の中は薄暗い霧が渦巻くように漂っていた。その中だけ別の空間のようだと思える。

「これが『タイム・ドア時空扉』？」

円盤型の機械は、時空を飛ぶための機械『タイム・ドア時空扉』だった。起動した円の内に入れば、平行世界に飛ぶことが出来る機械だ。この機械を使い、現在の世界とは別の時間を進んだ平行世界へ飛べば、コウキは捕まらないで済む、といつ最後の手段だ。

「お、おこ。本当に使えていいのか？」

//コキはコウキを『タイム・ドア時空扉』の前に無理矢理といった感じで立たせるが、円の中に飛び込むことをコウキは躊躇する。

「なんで躊躇うの？」

そのコウキの反応を、//コキは不思議そうに尋ねる。

「なんでって？」

円の前にある時空への扉は霧が渦巻いている状態にしか見えず、その薄気味悪さは尋常ではない。それだけでも飛び込むことは躊躇しそうになるが、コウキが躊躇する最大の理由は別にある。

「うううで躊躇してやがりやいかなーよー。前に行つても後ろに行つても、

じつとしてもあこづらに見つかるんだよ?」

「だからって、これなり時空を飛ぶのは

必死になつてこむ//コキにコウキは『タイムドア時空扉』の使用は考え直そ
うと言おひとするが、

「わつ　わー。うううでジタバタしてゐよつは絶対マシなんだつて
ー。」

の一言タイムドアと、『タイムドア時空扉』の田の中へと地中を押される。

「え……わー?」

急に背中を押されたことに驚き、また押されたことによつて自身の
身体が田の中に飛び込んで行こつとしてこむ」と、コウキは間抜
けな声を上げる。

時間がその時だけゆつくりと進んでこむかのよつて、あるこな口
ノマ送りの映像を見てこむかのよつて、身体が田の中に入るまでの
一秒足らずの時間をコウキは途方もなく長く感じてしまつ。

「おーーー///コ　……」

最後の一言は途切れ、//コキまで届かない。

消えていったコウキ//コキは別れの言葉を囁く。その表情はど
こか寂しげだった。

「ばーばー……わー

そのままミユキは起動させた『タイム・ドア 時空扉』を元の状態に戻す。これでユウキがあいつらに捕まることはないだろう。

（出現座標は変えたし、理論上はこれで上手くいくはず……。あとは代替で現れる人物の確保　ね）

そして振り返って、視線を前へ向ける。その表情は毅然としたモノに変わっていた。

序章 交わりの始まり ？

空の真上に昇つた太陽の日差しがとても強い。
その日差しから視界を守るようこゝ、『^{かみむちゅう}上村悠生』は手で視界を覆う。

「今日も暑いな……」

長袖のシャツは腕まくりをしており、だらんと首元を緩めた学校指定のネクタイがとても気だるそうな表情を助長させている。悠生が着ているのは、彼が通っている高校の制服だ。

悠生は学校からの帰り道を歩いている。

しかし、まだ下校時間ではない。本来の下校時間まではまだ数時間以上も時間がある。悠生は体調不良を訴えて、授業を早退したのだ。

(こんな暑い日は、家でのんびりとしてるに限る)

そう考える悠生だが、決して仮病を使つた常習犯ではない。本当に体調が悪いのだ。

(朝からついてねえよ……)

彼の朝はいたつて普通だと言える。それが他の人とほんの少し違うのは、起きたら家に誰もいなかつたということだけだろう。悠生が起きた時間も、登校には十分間に合ついつもの時間であり、寝坊をしたというわけではない。それでも起きたら家に一人だけ、といふことは今まで幾度もあった。

「帰つてシャワー浴びよ」「

それが悠生にとつてはついてない、ところどころになる。

そこには、悠生の家庭事情があると言えるだらう。両親の仕事にそれほど関心を持つていらない悠生は自身の親が何をしているのかはよく知らない。しかし、起きたら家に一人という状態が何度もあるとさすがにうんざりしてくる。それが少なからず、今の体調が悪いということに影響しているのかもしれない。どうせにせよ、今の悠生の気分はとても良いとは言えなかつた。

悠生が通つている高校から家までの街並みは、ずっと住宅街が続くなんてことのない道程だ。しかし、悠生は見慣れたその風景に何処か言い表せない違和感を覚える。

(……?)

すぐ目の前にある家の表札も、通るたびに吠えてくる近所の犬も、通り過ぎるとときに軽く会釈してくる優しいお婆さんも、何もかも見慣れた風景なのに、悠生は言葉では表現のできない不安を感じる。

「……」

立ち止まり、ぐるっと周囲を見渡すが、やはり昨日と何も変わっていない。暮らし慣れた街の景色が広がっているだけだ。

「どうかしたの、悠生ちゃん?」

悠生の様子がおかしいと思ったのか、子どもの頃から良くなじもらつてゐるお婆さんが心配そうに声をかけてくる。

「い、いえ……」

「本暁……？ なんだか顔色が悪いわよ？」

「あ、ちよつと朝から体調が良くなかったんで、学校を早退したんですよ」

「あひ、やうなの？」

帳尻を合わせるなり、会話をじてこの悠生の言葉をそのまま信じたお婆さんは本暁で心配してくれる。

「え、ええ……」

「それは安静にしてないと、お家に着いたら、お薬飲んでもぐに横になるのよ。」

お婆さんにとって、小さなこころから近所付き合いの一環として面倒を見ていた悠生は孫のような存在である。それ故に、悠生の心配はその家族よりも過度にしてしまつ節があった。

「はい、わかってますよ」

心から悠生の身体を素じてくれるお婆さんと、悠生は笑顔を見て答える。お婆さんも、その返事を聞いて安心したように「うう」と頷く。

「それじゃあ　」

やう言つて、悠生はお婆さんと別れる。

再び家路を歩き始めるが、やはり感じた違和感は拭えない。

(空氣が違うのか……)

悠生は、そう考える。

雨が降る前や降った後あるいは季節やその日の気温などによって、吸う空気の匂いや感じが微妙に変わっていると感づことがある。ついで、悠生は空気が違うのだろうか、と推測する。それはあながち間違いとは言えない。

昨日よりも湿度が高い今日は、生ぬるい空気はいつもと少し感じだらう。

(何なんだらう……)

感じる違和感に答えを出せないまま、悠生は家路を歩く。
照りつける太陽の光は一向に止まらず、かいした汗は不快感を一層に増すように身体を伝っていく。

それから、悠生が家に着いたのは一〇分ほど経った後だった。
玄関のドアを開けようとするが、ガチャガチャという音がするだけで、開く気配はない。朝、高校に行く前に悠生が鍵をかけたままなのだらう。

「……」

(やつぱりか)

気付いた悠生は仕方なく鞄を漁つて、家の鍵を取りだす。そしてドアのカギを開けて、家に入つていく。

「ただいま……」

家に帰ってきた悠生は一言も言つが、返事は返つてこない。

(当然……だよな)

家に帰つてきても『おかえり』の一言がもじれないと、悠生は少し虚しくなる。玄関に突つ立つてゐる悠生は自分が抱いた気持ちに気が付いて、

(馬鹿らし……。もう子どもじゃないんだし)

と、靴を脱ぐ。そして、帰宅途中でかいた汗を流そつと浴室へ向かおうとする。

「ふわあ～…」

欠伸をしながら、リビングに鞄だけを置いて浴室へ向かおうとする悠生はちらつとリビングに置かれているテーブルを見る。そこには朝見かけた置き書きが今もある。当然、家には誰もいない。

(……)

その書き置きを見て、苦い表情になる。それを振り払うかのように悠生は頭を振つて、リビングを後にする。

誰もいない家の中は昼間だというのに、とても暗い。カーテンを閉めているために太陽の光が室内まで届かないといふことももちろんある。しかし、それ以上に家の雰囲気が暗いのだ。その家の中に、リビングのドアを閉める音が虚しく響く。

廊下を数メートル歩いて脱衣所へ着いた悠生は、

「はあ……」

と、ため息を吐く。さらに体調が悪くなつたような妙な感覚を抱きながら、悠生は脱衣所で制服を脱ぎ始める。

脱衣所に設けられている洗面台の鏡に、悠生の顔が映りこむ。覇氣のないその表情は、虚ろそのものだ。

(せつせと寝よ……)

制服を脱いだ悠生は、そのまま浴室へと姿を消していく。鏡には誰も映り込まない。

電球が一つも点いていない家は恐ろしいほどに暗く、生活感を感じることができない。

悠生の家もそうと言えるほどに、家中に明かりがなかつた。それは悠生が朝起きたときには家に一人だつたから、というわけではない。日常的に電気が点いていることのほうが少ないのだ。

母親も父親も仕事で家を空けているとのほうが多いのは、悠生が子どもの頃から変わらない。だから、近所のお婆さんが面倒を見ててくれた。そのことに悠生は並々ならぬ感謝の気持ちを持つている。お婆さんがいてくれたから、今の悠生がいる、と言つてもいいほどだ。

家を空けていることが多い両親は公務員として仕事をしている。そう聞いたことがあるだけで、どのような仕事をしているのか悠生はよく知らない。単身赴任で父親が県外で数年働くといふことも経験したことがあるが、それでも悠生の興味を引くことはなかつた。

「暗……っ

シャワーを浴びた悠生がリビングに行くと、先ほどよりもさらに部屋の中は暗くなっていた。太陽に雲でもかかっているのだろうか。

あまりにも暗いと思つた悠生はリビングの明かりを点ける。悠生が明かりのスイッチを押すと、ずっとほつたらかしにされていたかのように電球は鈍い反応を見せて明かりを灯す。

リビングに明かりが点くと、おもむろにテレビのスイッチを点ける。家に一人でいると話し相手もおらず、声が聞きたいためにテレビを点けるのだ。

「……あ

畳のワイド番組を写しているテレビが置かれているテレビ台の端にこそっと置かれている家族の写真に不意に目が行く。まだ悠生が幼く、幼稚園にも通っていない頃の写真だ。幼い悠生は母親に大事そうに抱かれている。

写真には悠生と両親の他に、もう一家族写っていた。その家族の母親も当時の悠生と同い年くらいの子どもを胸に抱いている。

(……誰……だっけ ?)

ずっと気にもしていなかつた写真を見て、悠生は写っている子どもに意識を向ける。しかし、その子どもが誰だったのか思い出すことができなかつた。

「まあ、いつか

[写真の子どもにそれほど執着しなかつた悠生は、リビングのソファに横になつてテレビに映つてゐるワイド番組をただ見る。その番組では、『地域観光探訪』と題した観光コーナーを今はやつていた。

うとうとと視界が霞んでいき、意識は次第に現実から遠のいてい

く。」のまま寝ただなあ、とおぼろげに迷こながら悠生はソファから動いたとしない。

(あ……薬飲んでなこせ……)

そのことに気が付いた時にはもう夢心地の状態で、ソファのふかふかとした感触に悠生は全身が襲われていた。

(ああ、ここや)

コレクションの端の壁にかけられている時計の時間をみて、悠生はそれを睨み。朝飲んだ薬の持続効果はまだあるはずだ。
やつ判断した悠生は、今度こそ夢の中に落ちていく。

太陽も沈んだ夕方は、この季節ではようやく過ごしやすい時間帯になってきたな、という印象を与える時間である。昼間では歩いているだけで汗をかくことが日常茶飯事だが、太陽が沈めばそれもいくらか治まる。

「ふう……」

その穏やかになつてきた気温の中を、一人の少女が帰宅しようと歩いている。少女が歩いているのは閑静な住宅街の中だ。他に通りを歩いている人も見当たらない。ずっと先に見える十字路までずっと一軒家が続くような通りは、見栄えの良い景色もなくただ歩いているだけでは退屈でしかない。学校が家から近い、という理由だけで通っている高校を受けた少女は、帰り道の平淡さにとても飽き飽きとしていた。

そこに、四軒先の家から犬の吠える大きな声が聞こえてくる。

(今日は、あそこの犬吠えてるのね)

普段は吠えることのない犬が今日は大きく吠えていることに、少女は疑問を持つ。吠えることもないおとなしい犬として近所で小学生たちから人気のある犬なのだ。その犬が吠えていることは珍しいというよりも、初めて見ることに等しかった。

(何かいるのかしら……？)

そのように疑問に持つた少女は、そのまま吠えている犬がいる一軒家まで行ってみる。一軒家が近づくほどに、犬が吠えている声は

大きくなつてくる。

一軒家が近づいてくると、少女は近くの電柱の陰に何かが隠れていることに気がつく。

「……？」

（なんだろ　）

電柱の陰に隠れている何かに気を引かれた少女は、恐る恐る顔をのぞかせる。そこにあったのは、

「……っ！？」

氣を失っている少年だった。

（ひ……っ！）

そのことに気が付いた少女は悲鳴を上げそうになる。しかし、その直前で、

「あれ、上村くん　？」

少年の顔が、見知ったものであることに気がつく。慌てた少女は、氣を失っている少年の真正面へと移動する。

（やつぱり　）

少年の顔を真正面から見て、少年が自分の見知っている人物だと少女は再認識する。

(でもどうしたのかしら、上村くんは、体調が良くなつて早退したはずじゃ)

そう。

学校のお昼休みには調子が悪いと呟つて、帰るつとしている少年の姿を少女は目撃している。体調不良と言い、数時間も前に早退した人が今さら外出をするなんてことはないだろ。

それよりも、少女は少年が電柱に寄りそうようにして倒れていることを不思議に思つ。

「上村くん、だいじょう 」

意識があるのか確認するために肩を叩いて声を掛けよつとしたところで、少女は氣絶している少年の着ている制服が赤く染まっていることに気付く。

「……っ！？」

なんで赤く染まつているのだろうと顔を近づけ、

(血……?)

いつも認識した瞬間に、吐き氣を覚えて口元を右手で覆つ。

(な、なんで ー?)

大量の出血で倒れているのだと理解して、少女の頭の中で様々な疑問が一瞬のうちに駆け巡る。しかし、それらの疑問はここで考えて分かることではない。

とりあえず少女は少年をこのまま放置しておくのは駄目だと判断

して、少年の手を肩に回して家まで連れて行く。
少年の意識は、戻らないままだつた。

第一章 世界が交わった時　?

ふわふわとした感覚が悠生の全身を包む。

それはとても気持ち良くて、いつまでもその感覚を味わっていたいと思えるようなものだ。しかし、ずっとその感覚を味わっていることが出来ないと分かるような感覚もある。

「……ん」

吐息が自然とこぼれる悠生は、やわらかい感触のベッドに横になつている。その感触が悠生の感覚を誘導しているようだ。

ふと目を開けると、悠生がいたのは白を基調とした部屋の中だった。

「眠ってたのか……」

意識がまだはつきりしない悠生は、虚ろな目で部屋を見渡す。すると、その部屋が見慣れた高校の保健室だと気がつく。

(あれ、なんで俺、保健室なんかに)

状況が理解できない悠生は、記憶を辿りつと思考を巡らせたところで、鈍い頭痛を感じた。

「……っ！」

不意に感じた頭痛を抑えようと左手で頭を押さえる。
そこに、

「大丈夫か？」

悠生を心配するような声が聞こえてきた。

「……？ 拓矢……それに葵も……」

声をかけてきたのは、クラスメートである『吉田拓矢』^{たくや}だった。
その隣には、同じくクラスメートの『飯山葵』^{あおい}もいる。

「どうしたんだ、俺？」

「覚えてないのか！？」

悠生の発した言葉に、拓矢は驚いたような声を上げた。

「？ あ、ああ……」

「授業中に急に倒れたんだよ、お前……！」

「……倒れた……？」

少しづつ覚醒していく脳で、悠生は拓矢の言つた内容を理解する。
しかし、自分が倒れた、ということには疑問を覚えた。

(俺が、倒れた……?)

「全くびっくりさせやがつて。先生は貧血だろ？ って言つてたけど
「ほんとだよ～。すつごい心配したんだからね～」

拓矢と葵は、それぞれ悠生の身を案じてくる。そのことに悠生は感謝しながらも、目が覚めたら保健室で横になっていたという状況を必死に整理しようとする。

(おかしい……よな。体調が悪くて、畳には早退したんだし……)

保健室の壁にかけられている時計をみると、針は夕方にならつとする四時過ぎを指している。

(四時……つ！？俺が家で寝ようとした時間と)

悠生は体調不良で授業を午前だけ受けた後退したことと家に帰つたら早めにベッドに横になつたことをはつきりと覚えていた。その時間が記憶の中では、四時だったのだ。

(これせどりこつ)

自らの記憶と現実が一致しない」と、悠生は困惑した。

「どうした？」

そこに、悠生の様子がまだおかしいと感じた拓矢が心配そうに言った。しかし、その拓矢の表情から、困惑した悠生には恐く感じてしまつ。

「い、いや 」

田覚めた自分の状況が未だに飲み込めない悠生は、歯切れの悪い返事を返すことしか出来ない。はつきりと覚えている記憶が、今の現実をさらに困惑したものへと変えていく。

「ほんとに大丈夫か？ どつか頭打つたとかじゃないよな？」

「いや、やうじやないけど　」

身を乗り出して心配してくる拓矢の表情は悠生のことを心から心配しているかのようだが、状況が把握できない悠生にはその混乱を助長させるものでしかない。

「私、先生呼んでくるねつ」

その拓矢の横に座っていた葵が、悠生が目覚めたことを保健の先生に報告しに行こうと立ち上がった。

「ああ、任せた」

そう言って、葵が保健室から出ていくところを拓矢は見どびけて、もう一度悠生のほうへ向き直る。

「五時間目の現文の授業の時に倒れたんだよ。ほんとに覚えてないのか？」

「あ、ああ……」

「まあ、あんな倒れ方じゃ無理ないかもな。もづきょっと安静にしてろよ。その内、葵が先生連れてくるだらうしき」

起き上がろうとしている悠生に対して、拓矢はまだ横になつていろと言つ。たしかに頭痛はまだするとはいえ、悠生はそれほど深刻な状態ではない。そもそも現在の状況を把握したいがためにベッドから起き上がろうとしているのだ。

(学校で間違いはなさうだな……一人とも制服だし　)

けど、と悠生は思う。悠生の記憶では学校には午前中までしかい

なかつた。それは間違いのないことで、今が午後四時過ぎであることが理解できない。誰かのいたずらかとも思うが、家に帰つたことも覚えているので、いたずらはあり得ないだろひ。

(となると、考えられるのは)

そこまで考へたといひで、保健室のドアが開けられる。

「先生呼んできたよ！」

開けられたドアからは先ほど保健室を保健室を出ていった葵と白衣を着た腰まで届きそうな長い髪が特徴的な化粧でしっかりと作られている顔の『真田佳織』先生が入つてくる。佳織先生は保健の先生だ。

「真田先生！」

「どう？ 上村くんの容体は？」

拓矢の声に気付いた佳織先生は、悠生の身体の調子を尋ねた。

「さつき田覚ましたんですけど倒れるまどのこと覚えてなくて、まだ調子悪いのかなって思つて」「わづ……」

拓矢から悠生の容体を聞いた佳織先生は保健室の壁に設置されているロッカーから、薬の瓶を取り出す。

「拓矢、だから俺大丈夫だつて」「そう無理すんなつて！ 今日はもうこのまま授業もここで休んでろよ」

依然としてベッドから起き上がるとしている悠生に、拓矢は授業も欠席することを勧めてくる。

「そうね。あんまり無理しちゃいけないわよ」

それに、佳織先生も同調した。

「とりあえず、はい」

そう言つて、佳織先生は薬と「ップに入った水を差しだしてくる。

「？」

「頭痛薬よ。頭痛いんでしょ？」

「あ、ありがとうございます」

（なんで分かつたんだ……？）

疑問に思ひ悠生だが、差し出された薬をとりあえず水と一緒に飲みこむ。

「それ飲んで、もう一回寝なさい。次起きた時は身体もすつきりしてるでしょ。あなたたちも看病してくれてありがとうね」

「い、いえ」

「私たちは悠生が心配で……」

佳織先生に感謝の言葉を言われて、拓矢と葵はそれぞれ恐縮する。二人のその表情を見て、悠生は小さくため息を吐いて、ベッドに横になる。

(どっちにしろ、一人が心配してくれるのは本當か　　)

「あなたたちもそろそろ教室に戻りなさい。次の授業が始まる時間でしょ？」

「はい。それじゃ悠生、俺たち教室に戻るから」

「あ、ああ。ありがとうな」

「気にはすんなよつ」

一カツと笑顔を見せて拓矢は葵と一緒に保健室から出していく。その拓矢と葵を見て佳織先生が、

「いい友達ね」

「え、ええ。ずっと二人が看病してたんですか？」

「ん？ そうじゃないけど、休憩時間とか私が少し席を外してる時は二人があなたのそばにいたのよ」

「そつ……ですか……」

そう言つて、悠生は飲んだ頭痛薬の効用か自然と眠りについていく。

再び訪れる眠りは先ほどと同様にふわふわとした感覚を全身にもたらしていく、安堵感に満ちた幸福な眠りへと誘う。

意識がある、どの世界が現実なのか分からなくなるほど、それは深くゆっくりとした速度で悠生を導いていく。

第一章 世界が交わった時 ？

「…………」

悠生の意識の遠くの方で、誰かの声がある。

そのようじごんせりと感じて、悠生の思考がだんだんと回復していく。重たい瞼をゆっくりと開けていくと、そこは知らない景色が広がっていた。

(あつのは、夢 ?)

「おひー、田を覚ませよー！」

「やめてって……ー！」いちいち飛ばされたばかりで、あつと身体が疲れてるのよ

「そんな悠長に構えてられないんだぞ？」こいつは早く起きてもらわねえと

田が覚めた景色の中で、遠くから少年と少女の声が聞こえてきた。意識が戻る寸前に聞こえていた声に間違いない。

(「、」)

悠生は見えているこの景色がどこなのか判断できない。見える範囲のもの全てが煤^{すす}こけたような暗い色合いの空間だった。田が覚めても、悠生の脳が覚醒するまでにもう少し時間がかかりそうで、悠生はそこが部屋であることに気付かない。しかし自分がベッドに横になつていることだけは分かった。

セレニ

「おー よつやく田覚ましやがったな」

「ちよ……っ！？ そんな荒っぽく言つちやダメだつて！」

先ほどから言い争いをしていた少年と少女が声を掛けってきた。自分に掛けられた声を聞いて、悠生は顔だけを声が聞こえてきたほうへ向ける。そこに立っていたのは、

「拓矢……っ！？」

「あん？」

急に返された言葉に、少年は戸惑いの声をあげた。

しかし、悠生にはその顔に見覚えがある。というよりも、クラスメートの拓矢で間違いがない。その隣にいる 先ほど少年と一緒に声をかけてきた少女の顔は見覚えがなかつたが、クラスメートの顔を忘れる悠生ではない。しかし、その少年が着ている制服は、悠生が通つている高校のものとは違つている。

「え、えりこ……。ていうか、エリコだ……？」

やう言つて起き上がりつとした所で、不意に鈍い鈍痛が走る。

「痛……っ」

急に感じた頭痛に、悠生は不思議な感情を抱く。

(あ……れ……、この感じ前にも)

「何言つてんだ、おまえ？」

悠生が言いよつのない疑問を抱いていた。少年は意味がわからぬといふかのように言つてきた。

(……?)

少年の言葉を聞いて、悠生は困惑してしまつ。

現状を確認すると、悠生はベッドのようなものに横たわつてゐる。気が付いたら、ここに寝かされていたという感じだ。そして悠生がいる空間は、悠生が見たこともない部屋である。壁や床、天井が全て煤こけた暗い印象を与えてくる硬質感が溢れる空間だ。

そして、その部屋には悠生の他に、三人の男女がいた。一人は先ほど悠生に声を掛けってきた少年であり、悠生が拓矢と声をかけた少年だ。さらに一人いる少女の内、一人は少年と言い争いをしていた少女であり、言葉から悠生の身体の心配をしているようだ。最後に残つた少女は部屋のドアの辺りに佇んでいる。

「あれ、葵じゃないか……！？」

周囲をゆっくりと確認するよつとに見て、そのことに気が付いた悠生はまたしても驚いた声をあげた。部屋のドアに佇んでいる少女の顔がやはり見知った顔であったからだ。その少女も少年と同じ制服を着ていて、デザインから同じ学校のものだらう。

(拓矢と葵がなんでここに？ それよりもここは部屋……？
どこの部屋だ！？)

悠生の頭に、次々と疑問が浮かんでくる。なぜ自分はベッドに横になつてゐるのか、この部屋はどこなのか、拓矢と葵がなぜいるのか、その二人が着ている服がなぜ悠生が通う高校のものと違うのか。

それらの答えを求めるよつて、横になつてこる悠生のやばことる少女へ視線を向ける。

「全てを話して、あなたは信じてくれる?」

意味深にそつまつ少女の表情は悠生の身を察じているよつて、さら質問に対する真剣な答えを求めていよいよだ。

「…………」

その少女の表情を見て、悠生はすぐ言葉が出てこない。

(全てを話して　?　どうこうことだ……?)

少女の言つていることが理解できなかつた、といつこともある。悠生の疑問は「こゝがどこなのかであり、自分はなぜ横になつているのか、そして拓矢と葵がなぜここにいるのか、といつことだけだ。しかし、少女の言葉からはそれ以上の何かがあるよつた気がする。そう悠生は自然と思つた。

ベッドに横になつてこいる悠生は上半身だけを起して、少女の顔を真正面に見据えて尋ねる。

「全て　つてのは、どうこうことだ?」

「言葉のままよ。あなたがこゝにいる理由、私たちがあなたといいる理由、この部屋がどこなのかな、この世界がどこなのかな」

(「の世界、……つー?」)

少女の言葉に不可解なワードがあつたことに、悠生は気付いて訝りんだ。この世界、とはじつこつことなのだらうか。ただ考えてい

いぶか

るだけでは分からぬ。何よりもこの現状を知りたい、といつ一心で、

「わかつた、信じる……っ」

と、返事をした。

「そう。その返事が聞きたかったわ」

少女は一拍おいて、深く深呼吸をする。これから話すことがとても大事なことであるかのようだ。悠生の理解が間に合つよう。

「まず私は//ユキって言つわ。あなたの名前は悠生で間違いないわよね？」

「？ あ、ああ」

何の確認か分からぬが、悠生は少女 //ユキの質問に頷く。

「じゃあ悠生、私はこれから話すことについて、何を聞いても驚かず信じてほしいと思つてゐるわ。これから話すこととは全て眞実で事実だから」

「わ、わかつた……っ！」

さういふ念をおしてへる//ユキに、悠生は大きく頷いた。

「今、あなたがいる世界はあなたが暮らしている世界とは全くの別ものよ」

「……？ え つ？」

//ユキが言つたことが理解できないで、悠生は素つ頓狂な声を出

してしまつ。

「驚かないで、とつあえずそのまま私が言つたことを信じて！」

「あ、う、うん」

「そうね。仮にあなたが暮らしている世界を現実世界　『リアルワールド』と言つたら、あなたが今いるこの世界は並行世界　『パラレルワールド』、ということになるわ」
「平行世界……？」

言つてこる意味が分からぬ、とでも言つよつて悠生は聞き返した。

「やひ。あなたが暮りじてこむ世界とは別の時間を辿つてきた世界のことよ」

驚いた表情のまま固まつてこむ悠生は、ハニキはなるべく優しく声で説明する。

「な、なんで……俺がそんな世界に？」

「まあ、そう疑問に思つてしまつね」

悠生が抱いた疑問も、当然のよつてハニキは理解した。

「おひ、説明にそれほど時間をかけてられないだ」

言葉を選ぶようにゆづくつと話しこるハニキは、部屋のドアの傍に立つている少年が急かしていく。

「分かつてゐわよ。でも、誤解せぬよつの説明もできなこでしょ

横槍を入れてきた少年を一蹴して、ミコキは話を続けていく。

「あなたが、」^{ワールド}こちらの世界に来た理由は後で説明するわ。まず平行世界から説明させてもらつわね。あなたは世界が一つしか存在しない、と証明できるかしら？」

「世界が一つ……？」

「そう。世界が、あなたが暮らしている世界だけだと、どうして言いい切れる？ そんなこと証明できる人はいないはずよ。世界が二つ以上存在するということも証明できなければ、そう考えた人たちが昔いたの。その人々は、複数存在する世界を移動する手段を確立させようと何年も研究を続けてきたわ。あるかも分からぬ世界のためにね」

ミコキが話す内容のことは、とてもいきなり信じることが出来るものではなかつた。並行世界という概念が存在することは悠生も知つてゐる。しかし、それは作り物の世界において、だ。現実に存在すると思つたことは一度もない。

だが、先ほどから部屋の隅にいる拓矢だらう少年と、葵だらう少女の様子が、悠生を友達だと認識しているように見えない」とて、悠生は不安を抱いていた。

「世界が二つ以上存在するのか、それを確証することもせずに、その人たちは時間軸を移動する手段を確立してしまつたわ」

「それはどうやつて……？」

当然のように疑問に思つた悠生は、ミコキの話を中断させるよう

に疑問を口にする。

「……、これがその答え よ」

少し躊躇する様子を見せたミコキだが、観念したように肩に掛け
ていたバッグから手鏡ほどの大きさの丸い機械を取り出した。

「お、おい……っー？」

そのミコキの行動を見て、部屋のドアを見張るよつに控えていた
少年が止めようと口を開くが、

「構わないわ。全部を理解してもらうためよ」

ミコキは自分たちの秘密を打ち明けることに躊躇はない。

「それは？」
「これは『タイム・ドア時空扉』。時空を飛ぶための機械よ」
「……？」

ミコキの口から発せられた言葉はそれまでの何よりも理解し難い
ものだった。手の平に収まるようなサイズの機械が、本当に時空を
飛ぶことができる万能の機械というのだろうか。悠生にはとてもじ
やないが、その話が信じられない。

「まあ、そうでしょうね。でも、これを見たら、あなたもこの世界
があなたが住んでいる世界と違うことを信じるしかないでしょう？」

そう言つて、ミコキは部屋に一つだけ設けられている窓のカーテ
ンを開ける。

そこに広がっていた景色は薄暗く、しかし分厚い雲が空を覆つど
んやりとした雰囲気の街の全貌だ。見える街の景色も硬質感漂う様
々な建造物が建ち並んでいるが、そのどれもが半壊状態だった。建

造物の外壁が崩れ落ち、その中が容易に視認できるほどだ。まともに人が暮らしている街の様子には見えない。

「い、これは……！？」

「信じてもらえたかしら？　まだ夜明け前だから空は暗いけれど、街の景色はもう何年もずっとこのままよ。あなたが暮らしている街はこんな景色？」

ミコキのその一言で、悠生は窓から広がっている景色の中に見覚えのある建物があることに気付く。

「あのホールは……」

「そう、『市立スポーツ文化ホール』よ。昔はあそこでよくイベントが開催されていたのにね……」

『市立スポーツ文化ホール』、それは悠生にとつても思い出が詰まっている場所だった。そのホールが見るに堪えない状態であることに、悠生は驚く。

「そ、そんな……。先週だって、あそこで試合があったのに……」

「それは、あなたの世界での出来事でしょ？　私たちの世界では、あのホールはもうずっとあのままで……」

今じゃ人が立ち入ることもないわ、という一言を飲みこんでミコキは寂しそうな表情を見せた。その表情に悠生はズキンとした胸の痛みを覚える。

(な、なんだ今の……！?)

自分の反応に戸惑っている悠生に気付かずに、ミコキは話を続け

る。

「どうかしら？ 私の話も信じてくれる？」

話は全て信じ、と言っていたミコキだが、悠生が信じているかどうかの確認を再度行つてくる。それは、悠生に目の前の事実を理解してもらい、全てを信じてもらうためだ。疑心があるまで話しても、肝心の伝えたいことを理解してもらえないかも知れなかつた。

「……こんな街を見せられたら、信じるしかないだろ……」

そう言つ悠生は、顔面を蒼白させている。それは目の前の光景が信じられないという感じではなく、なぜこうなつてしまつたのかといふ疑問によるものだ。

「良かつたわ。ここまで話して信じてもらえないなんてなつたら、大問題になるといつだつたからね

「大問題？」

「ええ。でも、そのことについてはこれから話を理解してからね

「

ミコキは、そこで一拍置く。

今すぐにも壊れそうな木製の椅子から立ち上がつた彼女は、先ほど取り出した手鏡ほどの大きさの機械『タイム・ドア 時空扉』を部屋の壁にセットする。

「？」

ミコキの行動の意味が分からぬ悠生は、はてなマークを頭に浮かべている。

「さあ、この機械が時空を移動する手段だと話したわね。つまり、あなたはこの機械によつてこの世界に運ばれてきたことになるわ」

悠生への説明を再開した少女は、壁にセットした機械の中央に設けられているボタンを押す。すると機械は眩しい光を放ちながら、その丸い淵を円状に広がらせていく。

「な、なんだ……っ！？」

起動した『タイム・ドア時空扉』は直径二メートルほどの大きな円を作り、その内部は薄暗い霧が渦巻いている。先ほどまで放っていた強烈な光も、起動が終わると治まり、元の鈍い銀色の光沢だけが残つていた。
「これが『タイム・ドア時空扉』。」の中に入れば、並行で存在している世界へ飛ぶことができるわ
「」「これが……」

部屋の天井にまで届きそうなほどに広がった『タイム・ドア時空扉』を見て、悠生の開いた口が塞がらない。その視線は真っ直ぐ『タイム・ドア時空扉』の円の中に向けられている。

（まるで漫画かアニメの世界のような　）

単純な感想しか思い浮かばない悠生は、その円の内側をじっと見つめて、そこで気が付く。

「……っ！　これが時空を飛べる機械なら、俺がぐぐれば元の世界へ戻れるんじゃないのか！？」

それなら帰れる、と強い期待感を込めて悠生は//コキのせつへ振り向く。しかし、

「……残念ながら、それはできないわ……」

「……!? な、なんで？」

当然のような悠生の疑問に、//コキは答えていられない口を開ざす。その顔は先ほどよりも暗い。

「なんでだよ！ 田の前に時空を超えられる機械があるんだろ！？ 僕だってこの世界のこと信じたんだ。世界が二つ以上あることは分かった。なら、この機械使えば世界を超えることも実証済みじゃないか！…」

「そ、それはそつなんだけど……」

//コキの返事は歯切れが悪い。そこそこ、

「全部をちゃんと話せよ。ここまできたら話さないほうが、後味が悪い。追手はまだ来なさそうだ」

じつと立っている少年が口を挟んだ。その顔はカーテンが開けられた窓に向けられている。窓の外の街を見ているようだ。

「タクヤ……」

その少年に部屋のドアの前に控えている少女が「口を挟んじやいけない」と忠告する。しかし、その前の単語に悠生は敏感に反応する。

「拓矢……？ やっぱり拓矢なんじゃないか……」

「あ……」

悠生の言葉を聞いて忠告をした少女がしまった、とこうよつた表情を見せた。

「バカ。せつかく黙つてたのに」

「「こ、こめん」

「ひうなつたら仕方ない。おい、お前、一つ言つておくぞ。俺はお前が知つてる拓矢とは違う。このちから世界とあちらの世界をじつちやにするんじやねえよ」

「え……？」

少年 タクヤの言つたことに、悠生は驚いた。

「困惑しても無理ないでしょ？ 私が一番に説明すればよかつただけなんだけど……、そこにこるタクヤはあなたの世界にいる拓矢とは別人なのよ。全く同じ顔をしてるけどね」

驚いてこる悠生に、ミコキが補足を加えた。そのミコキの言葉に、悠生はさらに混乱する。

「ど、どうこいつ？」

「世界が一つ存在しているのよ。それぞれの世界に同一人物が存在していても不思議じゃないでしょ？ というよりも、あなたの世界にいる人はこちらの世界にもいるって言つたほうが正しいかしら」「同じ人物がそれぞれの世界に存在する……？」

「そうよ。何を疑つているの？ 現に目の前にいるタクヤは、あなたの世界の拓矢とはDNAレベルで同じだけれども、辿ってきた記憶は全く違つわ。あなたも違和感を感じなかつた？」

そう言われば悠生は拓矢と葵と同じ顔をしている一人に対しても、知っている一人と違うといつよつ妙な感覚を抱いていた。

「たしかに、そなんだな？」

ミコキが言つてることを確認するより、悠生はタクヤへ問いかける。

「ああ、そうだ。俺はユウキは知ってるが、お前は知らない」

「ユウキ……？」

タクヤの口から出た言葉に、悠生は眉をひそめる。

「はあ……。俺がこちらとそちらの世界にいるように、お前と瓜二つの奴がこちらの世界にいたとして不思議はないだろ？」

「…………」

鈍感な悠生にため息を吐きながらもタクヤは教えた。その可能性を考えなかつたわけではないが、改めて言われると悠生は複雑な気持ちになる。急に自分には双子の兄弟がいるのだと言われたような気分だ。

「そういうことよ。そして、あなたがこちらの世界に来た最大の理由は、こちらの世界にいたユウキが、この『タイム・ドア 時空扉』を使ってあなたの世界へ时空を飛んだから」

「…………？」

さりに打ち明けられる事実に、悠生の反応が追いつかない。しかしユウキは話を止めない。最初に言った「そのまま信じて」の言葉

の通りに。

「あなたは、ユウキがこちらからあなたの世界へ飛んだ代替として
やってきたの」「な、なんで……？」

「この『時空扉』^{タイム・ドア}は未完成で、誰もが使えるというわけではない。
唯一使える人物が、こちらの世界のユウキだけ。彼が持っている能
力とこの『時空扉』^{タイム・ドア}を合わせて、ようやく世界を超えることができるの」

「能力？」

ミコキの口から不可解なキーワードが出たことに、悠生は気付いた。その言葉を反芻^{はんすう}すると、ミコキは何かに気付いたように言いだす。

「やつこえば、どちらの世界には『覚醒者』はないのね」

(『覚醒者』……?)

「こちらの世界では、『覚醒者』と呼ばれる人たちがいるわ。その
人たちはみな、それぞれに人知を超えた能力を備えているの。私も
『覚醒者』なのだけれど、私は風を操ることができるわ」

小さな風にね、と言ったミコキは右手の人差指を立てて、無造作に部屋の中に風を生み出す。その風は緩やかながらも、悠生の耳にかかるほど前の前髪を持ち上げる。

「な……っー?」

不意に風が起ったことに悠生は驚いた。

部屋は悠生が目覚めた時から、ドアも窓も閉め切つていて風が起る状態ではない。もちろんエアコンなどの風を送る機械などもこの部屋にはなかった。

「わかった？ 私は自由自在に風を操ることができ。そして、タクヤは？」

「俺はパソコン等の電子機器あるいはネットワークにアクセスすることができる能力を持つててる」

ミコキの言葉を引き継ぐようにタクヤが言った。大した能力でもない、といった感じの口調だが、悠生には能力差の度合いが分からぬ。

「私は、他人の視界を共有することができる能力を持つてるわ」

そして、先ほどからずっと部屋のドアの前に立つて居る少女アオイが口を開いた。

「共有……？」

「実演するなら、今あなたの視界にはミコキの胸の谷間が入り込んでいて、あなたはちらちらと盗み見ているわね」

「な……っ！？」

「ぶつ！」

アオイの言葉に、ミコキと悠生がそれぞれ違った反応を見せる。

「な、なんで分かつて」「

「ど」「見てんのよ！」

悠生の視線に恐怖を感じたミコキが着ているタンクトップの胸元

をカーディガンで隠す用にして、悠生を庇つべ。

「痛……っ！」「誤解だつて……」

「何が誤解よ。アオイの能力は絶対なのよ。」

声を荒げるミコキは頬を赤くしながら、さらに悠生を掴みかかる
うとするが、悠生が危険だと判断したタクヤがミコキを止める。

「おい、それくらいにしどけつて」

「ちょ っ！ 私が真剣な話してゐるのに、口汚い口してたのよ。.

?」

「殴るなら後にしろよ。お前が全部話すつていづから、いつちは付
き合つてんだぞ？」

「ぐ……。わ、わかつたわよ。」

しふしふとタクヤの言葉に従つ//ミコキだが、その手は先ほどよつ
も鋭くなつている。

(うわあああ、しまつたな……)

//ミコキに睨まれた悠生は、萎縮したようにベッドの上で縮こまつ
てこむ。

「ま、まあ、これで私たちの能力は分かつたでしょ？」

先ほどの調子を取り戻そと軽く咳払いをしたミコキは再び
説明を始める。しかし、赤くなつた頬はそのままだ。

「あ、ああ……」

額ぐ悠生も氣まずそつで、声が小さい。

「そ、それで、このちの世界の俺もその『覚醒者』なんだな？」

「ええ、そうよ。そして、この『タイム・ドア時空扉』ももともとはコウキの能力を含めた機械と言つべきかもね。どういうカラクリで時空を飛べるのかは私たちは分からぬけど、研究者たちは自信を持つてたみたいよ」

「あんたらがそれを作ったんじゃないのか？」

「何を言つてるの？ サッキも言つたけど私たちはただの『覚醒者』よ。これを作つたのは、コウキの両親が所属している研究グループよ」

「両親……？」

「あなたのじやなくてね」

「それは分かつてるよ！ でもカラクリが分からぬってのは？」

それを一度使つていながら、仕組みも分かつていなることに悠生は疑問を抱く。仕組みも分からぬ機械をよく使う氣になつたもんだ、と。

「私たちは時空を飛べるわけじゃないからね。知らないでもいいからスタンスなんだけど、コウキの『空間移動』『座標移動』とも言えるかしら の能力とセットで使つことで初めて世界を超えられるらしいのよ」

「『空間移動』……」

どうやらコウキの能力はそういうらしい。言葉の意味から、悠生は瞬間移動するような能力なのだらう、と判断する。

「それで、コウキがなぜ、この『タイム・ドア時空扉』を使ったのかといつと

そこでミコキの言葉は止まる。

その瞬間に、窓の外の街の建物から大きな爆発音が響いてきたのだ。

「……つ！？」

「な、なんだ　！？」

不意に起つた爆発は周囲に衝撃波をまき散らす。それは悠生たちがいる部屋にも届き、窓がガタガタと揺れ、部屋全体が鈍く振動する。

「追手が来たんだ！！」

いち早く反応したアオイがいきなり大声を上げる。

「追手！？」

「ち……つ！　もうここがばれたか　！？」

悠生は不穏な言葉に驚き、タクヤは追手が来たといつことに驚愕する。

「相手はどうだ？」

慌てたように窓を開けたタクヤは、身を乗り出して周囲に目を配らす。

「数ブロック先の複合ビルよ。しきりみづしき探してゐるよつだけど、こちりに確實に近づいてゐるわ」

慌ててこるタクヤを落ち着かせようとアオイはやつ報せます。

「数ブロック……。あと数分で这儿に来るでしょう。場所を移すわよーーー！」

アオイの報告を受けた、ミコキは部屋から出ると叫ぶ。その表情はタクヤ同様に慌てているように見える。

「移動するついでここへ？」

部屋から出ようと起動させていた『タイムドア 時空扉』を仕舞おうとしているミコキに悠生は尋ねた。

「私たちの『家』だよー！」

陽が昇る前の空は次第に明るくなつていいく様を如実に表していて、生物が起きる前の静けさを一段と感じさせてくる。

しかし、その静けさは今はない。

半壊した硬質感の漂う建造物の一つに、黒から灰色に変わつてゐる空を一部燃えたぎるほどの赤に染めているビルがある。そのビルは勢いを止めない炎に飲みこまれている。黒い煙が空高くまで上がり、周囲に焦げた匂いを捲き散らかしているビルの中で、一人の少年が立っていた。

「ijiも違つみたいだな」

ぱつりと歯く少年の田は、田の前に広がつてゐるビルを燃やしつくそうとしている炎に注がれている。

その炎を見て、少年は不敵な笑みを浮かべる。

少年の背丈はそれほど大きくはない。少年の歳の平均身長よりも低いだろうか。全身黒い服装に身を纏つた少年は鋭い目つきで、じつと燃える建物を睨んでいる。

「おい、トモヤ。それくらいにしどけ、次行くぞ！」

その少年　トモヤに、男が後ろから声をかけた。その男はさきほどまでコウキを捕まえようとおいかけていたスピーカーの声の男だ。

「なんだよ、ijiはもう終わりか？　俺は足りねえぞ？」

「それは次の場所でやればいいだろ? 」
「あらはすぐにでも追いかけたいのだがね……」

「ちえ つ。しゃあねえな」

スピーカーの声の男に言われて、トモヤは燃え盛る炎に背を向ける。

「そのユウキつてやつは、少しは骨がある奴なんだろ?」

「ああ、我々の手から何度も逃れている奴だからな」

「それ、単にあんたらの力が足りないだけなんじゃないか? 大体さつきの追走戦から俺を出しておけばよかつたんだよ」

スピーカーの声の男の言葉を胡散臭そうに思つトモヤは、氣だるそうに言つ。その表情はとてもつまらなそうだ。

「そう言つな。向こうも『覚醒者』だという確証がなかつたからな。たしかに我々の力不足はあるだろうが、お前を出し惜しみしたわけじゃないさ。相手が『覚醒者』だと分かれれば、こちらも同じ土俵で臨むだけの話だ。

「ルールが決まつてるリング上での殴り合いじやないんだぜ? 初めから全力で狩ればよかつたんだよ、ライオンみたいにな」

スピーカーの声の男の話にトモヤは食つてかかる。相手のレベルに合わせて、とでも言つよつた言葉遣いにいらついているように見える。

「たしかにそうだな。それは我々の意識不足が招いた結果だ。相手はお前と同じ『覚醒者』、いくら束になつても、我々一般人には敵わないということか。悔しいことだな」

「初めつから負け犬根性満載じやねえか。そんなんじゃ勝てる勝負

も勝てやしねえよ。」うちが有利だつていう要素をいくつ作れたか
が重要なポイントだらうが。それが力の差だらうが、精神的な気持
ちだらうが、何ら変わりやしねえよ」

軽く言つてのけるトモヤは男の言葉をさして気にしている風では
ない。それよりも『覚醒者』であるコウキと相対することを待ち望ん
でいるようだ。

「はつは。簡単に言つてくれるな。そう言つてくれるお前がい
てくれれば、こちらも百人力だ」

「はつ！ 僕が百人力？ そんな程度だと思つなよ？」

ニヤリと笑うトモヤの顔は、強敵を求める貪欲な狩人のものだつ
た。

その目を見て、男はドキリとする。

（威圧感からして、我々と違うな……。これが『覚醒者』という人
種か）

トモヤの表情を見た男は足をすくませてしまつ。それに気付かな
いトモヤはさつさと歩いていく。その背中は、異様な威圧感放つて
いた。

空へと上る黒煙は、その勢いを止めず、ビルを燃やす炎は依然と
して強烈な光と熱を新しい一日が始まろうとしている街に放つてい
る。

第一章 世界が交わった時 ？

太陽が昇る前の街を悠生は必死になつて走っていた。その前を//コキとタクヤ、アオイの三人が走つている。

「はあはあはあ……」

乱れる呼吸を無理矢理整えながら、悠生はそれでも足を止めない。いや、止めるわけにはいかなかつた。

「追手は……つ？」

「まだ距離はある。けど、//つちが移動したのに気付いたのかもつ！ 車使いだした！！」

「ち……つ！ 車！」

(装甲車かしり……?)

アオイの報告を聞いて、//コキは一瞬考える。悠生を捕まえるまでに追われていた男たちが追手だとしたら、その考えは間違いではないだろ？。

「おい、車つてどうすんだよ！？」

「どうするもなにも。向こうつがそれだけ本気つてことよー」

「けどよ、//のまま真っ直ぐ逃げても追いつかれるだけだぞ！？」

走りながら会話をしている//コキたちの足はとてもなく速い。油断をするとみるみる悠生との差がひらいてしまう。だから、悠生は疲れても走る足を止めるわけにはいかない。

「はあはあ……」

（なんだよ、ここから。めっちゃ足速いじゃねえか　っ）

必死に追いかけている悠生だが、その差は詰まらない。真っ直ぐな平坦の道で、女の子にも走ることで負けてしまつ悠生は少しいうつぶ。

（だいたい追手ってなんなんだよ　。なんで俺はこっちの世界に飛ばされたんだ！？）

「はあはあ……はあはあ……、わけわからんね　っ」

状況が理解できない悠生はわけも分からず、ミコキたちの後を追いついて走っているのだ。

（もう少しで聞けるとこだつたのに……）

ビルが爆発する前に聞こえていたミコキの声が頭をよぎる。彼女は間違いなくユウキが『タイム・ドア時空扉』を使った理由を言おうとしていた。その言葉は爆発が起ことで途切れだが、何か深刻なことが起こっていることは悠生にも想像がつく。しかし、それに自分が巻き込まれていることが理解できないのだ。

「なんだってんだよ……っ！」

煮え切らない怒りがふつふつと湧き上がってくる。それは放し出する方向も定まらない怒りで、悠生自身もどうしようもなかった。なぜこの世界に飛ばされたのか、なぜ追いかけられているのか、

誰が追いかけられているのか、なぜミコキたちと一緒に逃げなければならないのか。悠生には分からないことがいくつもある。しかし、頭にはミコキの「そのまま信じて」の言葉が何度も反芻^{はんすう}される。

その全てのうつぶんを晴らすようになり、悠生は大声を上げた。

? .

背中にかけられた大声で、悠生の前を走っていたミユキたちが立ち止まる。

立ち止まつたミコキたちに追いついた悠生は膝に手を当てて、肩で息をしている。その顔にはびっしりと汗が流れていた。

「なんだよ、お前が遅いんだろ」「ちょ、タクヤ つ！」

口調が悪いタクヤをたしなめるよつて風のノキだが、タクヤは

口を閉じない。

「だって、そうだろ？　じつちは必死こいて逃げてんのに」

「 そ う だ け ど 、 言 い 方 つ て も の が …… 」

「なんだよ、トロトロしてるのは事実だろうが！」何のために俺ら

がこうして

「だから、やめなつてー。」

れいにこりだつよひロ口調を荒げるタクヤを//コキは必死に止め
る。

「リリしてゐる今もあいつらは近付いてきてるのよー。リリで言
争にしても仕方ないでしょ？」

(あいつら……?)

まだ中腰で呼吸を整えようとしてゐる悠生は、//コキの言葉に敏
感になる。

これも何度田だらうか。悠生は自覚がないが、この世界のことは
分からぬいが//コキの話には重要なことが隠されていふと悟つてい
る。

「だとしたら、もつと先を急ぐべきだろ?」

「そうだけど、私たちだけが先を急いで仕方ないでしょ?」

「だけど」

引き下がろうとしたらいタクヤだが、そこに悠生が割つて入る。

「な、なあ! 一つ教えてくれ。追手が来てるって言つてたけど、
誰が追われてるんだ? それに追手つてなんだよ。それを最初に説
明してくれてもいいだろ?」

意味も分からずにただ走るのはいまだ、と状況の説明を悠生は
求める。

「……」

「おまえ

」

「頼む。俺には並行世界パラレルワールドってだけでも頭がパンクしそうになってるくらこなのに、追手が来てるだとか頭がついてけねえよ」

身ぶり手ぶりを大きくして、悠生は必死に訴える。

半壊の建造物が均等にブロックに分かれている街並みの通りのど真ん中で、悠生たちは立ち止っている。そこからも、今も燃え盛っているビルが見える。悠生はそのビルのほうへ視線を向けて、

「あれと俺たちが逃げていることは間係あるんだよな！？」

「……」

「なあ？ 教えてくれよ！ なんで逃げてんだ！？ 誰が、なんで追われてんだ！？」

一向に自分の疑問が解消されない悠生もタクヤ同様に声を荒げる。その言葉にタクヤはせりたいらりしてしまう。そして溜まった怒りを放出するよう、

「ほつんとおまえ頭悪いな！ 追われてんのはお前に決まってんだろうが！…」

「え……っ？」

タクヤの言葉に、悠生は驚いた。その表情は時間が止まったように顔が凍りつく。その表情を見て、タクヤも驚く。

「ほんとに気が付いてなかつたんだな　たく……っ。こっちの世界のユウキが『タイム・ドア時空扉』を使って世界を超えたのも、追われるからに決まつてんだろ！ お前が代替としてこっちの世界に来たのも、そのことを奴らに知られないためにだよ！ 僕らがこうしてお前を匿かくまつて、こっちの世界のことを教えて助けようとしてんのも、まだ

奴らがコウキが時空を越えたことも知らないからだ！ つまり、奴らはお前がこっちの世界のコウキだと思つて今も追いかけてきたんだよ……」

「なー？」

(俺が狙われてるって)

立て続けに言われる事実に、悠生はさうりに驚愕する。顔面を蒼白にさせている悠生は、その事実に言葉を紡げない。自身のこりつきを吐きだしたタクヤはすつきつとしたようで、ミコキのほうに顔を向ける。

「はあ

(言ひちやつた か……)

その視線の意図を汲み取るよつて、ミコキはタクヤの言葉を引きとるように話を続ける。

「話してなくてごめん……。というよりも、その前に追手が来ちゃつたんだけど。あなたがこちらの世界に来た理由は、半分はタクヤの言つ通りよ。事後報告みたいになっちゃつて」「めんなさいね」

申し訳なさそうにミコキは言ひ。その声色に、悠生は憤りをぶつけただけのこと気に付く。それは仕方のないことだったが、それが助けてくれようとしている人たちへのひどい所業に思えたのだ。

「い、いや

それまでの勢いを失つたような、小さな声で悠生は返事をする。

「教えてくれてありがとう……」

そう小さく言ひとじか出来なかつた。

(俺は代替品……)

その一言が悠生の胸を抉る。

それは、この世界での悠生の存在意義だ。悠生の知らないところに行われた時空移動は、悠生を大きな時空の流れに巻き込んでいた。そこに悠生の意思は汲み取られていない。あくまでも受け身でしかない悠生はその流れに身を任せただけであり、流れに逆らうことができるない。それを悠生は自ら証明してしまつていて。

「…………」

その悠生に対し、ミコキはかける言葉がみつからない。

無理矢理巻き込む形で悠生をこちらの世界に連れてきてしまったことには、無論申し訳ない気持ちがある。コウキの時空移動は最終手段だったとしても、その代価は同じDNAを持つ人物をコウキの代わりに危険な目に合わせることだ。その人物 悠生の意思も気持ちも考へず。

「あなたにはどれほどの償いをしても許されないことは私も理解している。無理矢理こちらの世界に連れてこられた怒りをあなたが抱いても不思議ではないし、私たちが信用できないことも分かるわ」

それでも、ヒコキは言葉を続ける。その声に万感の思いを込めて。

「あなたは私たちがいる。あなた　いえ、あなたとユウキが生きていることが私たちの世界の未来になるかもしないの」

真摯な田は真っ直ぐと悠生の手を捉える。

「世界の未来……？」

そして、その言葉の重さを悠生は何となく理解する。説得や同意を得るために、そのような言葉を使う人はいないだろう。そこには何か、もっと大きな理由があるはずだ。その理由が、先ほど感じた「こちらの世界で起こっている何か深刻なことと繋がっているような気がした。

「ええ。私も全てを知ってるわけじゃないんだけど……。それについては逃げきつてから話すわ。タクヤも言ったように、今は逃げることが最優先よ。あなたが捕まることだけは避けないと」

そう言つて、ミコキは先を急いでまた前を向く。ゴールがあるかも分からぬにマラソンに向かうようで悠生は少し嫌な顔をするが、追われているのが自分と分かつた今はいやいやと愚痴も言うわけにはいかない。

「さあ、行くわよ　」

悠生の決心したかのような表情を見て、ミコキは掛け声をかける。そしてミコキを先頭にまた走りだそうとしたところへ、元気

「おつと、どこに行くんだ　？」

血の氣に飢えたような、貪欲な声が聞こえてきた。

「……っ！？」

「なんだ？」

不意に聞こえてきた声に、ミコキとタクヤがそれぞれ驚きながらもすぐに構える。声が聞こえてきたのは、これから行こうとしていた方向からだつた。

聞こえてきた声と同時に、目の前の壊れた信号機が大きな音と強烈な炎にまかれながら倒れていく。そして、あつとう間に周囲は燃え盛る炎に囲まれてしまつた。

「やつと見つけたぜ、ユウキよオ。ここでお前を殺しても文句はねえんだろ？ なア！？」

その炎の壁の中から、獲物を見つけた狩人のように、また血肉に飢えたライオンのように鋭い眼光を飛ばして一人の少年が姿を見せる。

第一章 世界が交わった時 ？

空気を焼きつくすような炎が、今にも枯れ果てようとしている街路樹の命をさらに縮めようと盛んに燃えている。その炎は全壊あるいは半壊した建物ばかりの街の大通りを走っていた悠生たちを、これ以上どこにもいけないようにはじめに囲つている。

その炎に囲まれた悠生たちは苦虫を潰すように周囲を囲つて、炎を睨んでいた。その炎の壁から現れた一人の少年　トモヤがさらにはじめに口を開く。

「…つたぐ。あっちこっち逃げてくれてよオ。こっちの労力をこれ以上割かせないでくれよな」

貪欲な目をしているトモヤの表情は、血肉を求めている肉食獣でしかない。そのトモヤの身体は、地上二メートルも燃え上がっている炎の中を歩いたにも関わらず火傷を負つたわけでもなく着ている服も燃えていない。

(『覚醒者』か)

その服と身体を見て、悠生を除いたミコキたちはトモヤが『覚醒者』だと気が付いた。

「おい、ミコキ……」

「うん、分かつてゐる。向こうが雇つた『覚醒者』でしょうね

タクヤの耳打ちに、ミコキは頷いて答えた。『覚醒者』を出してきたということは、さらに本気になつたということだらう。

「さて、俺の狙いは分かつてゐるよなア？ そつちがコウキを差し出すなら、他の奴は見逃してやつてもいいぜ？」

交渉を行つてくるトモヤだが、それに乗るミコキたちではない。無論トモヤもそれを理解しているだろう。それでも、それがトモヤのやり方なのだ。その形式あるいはルーティンを崩したくないのだらう。

「おー、何勝手なことを言つてこり?」

そこに、スピーカーを介した声が聞こえてきた。その声は、やはり先ほどからコウキを追いかけている男の声だ。

聞こえてきた声に驚いたミコキたちはどこから話しているのかと周囲を見渡すが、どこにもスピーカーの声の男の姿は見当たらない。「すでに、我々の存在と計画の一端を知つてしまつたのだ。コウキ以外は殺せ」
「……つー?」

スピーカーを介して聞こえてきた言葉の内容に、悠生たちは目を開いて驚いた。その声はあまりにも平淡で感情がないものだった。

(本氣で殺す気か……)

その本氣を受け取つたミコキは、この状況が危機的だと改めて認識する。『覚醒者』の数では圧倒しているが、まともに正面からぶつかつたとしても必ず勝てるという算段があるわけでもない。

「なんだよ……つたく。俺なりのやり方つてのも認めてくれて

もいにんじやねえのか、シンジの奴はよオ

スピーカーから聞こえてきた声を聞いてトモヤはシラけたとでも言つよしに、声のトーンを落とした。

(シンジ?)

トモヤが言つた名前にミコキたちは顔をひそめる。その名前が指しているものをつりすらと考へるが、それを確認し合ひ時間すらもトモヤはつかない。

「しゃあねえ。わざと仕事を終わらせてもらひながら つー^{タマ}
「まず つー。」

トモヤは一度の跳躍で数メートルの距離を一気に縮めてくる。その動きを見て、ミコキはその狙いを思い出すが、それよりもトモヤの突撃の方が速かった。トモヤあるいはスピーカーの声の男たちの狙いはあくまでもコウキである。コウキがすでに時空移動したことを見らないトモヤの突撃も真っ先に悠生を狙つたものだった。

「がつは つー?」

そのタックルと呼ぶにはあまりに衝撃の多い突撃を受けた悠生は、為す術もなく吹つ飛んでしまう。

「一発で終わると思つくなよーー。」

一撃田を悠生につかえたトモヤはさうと追撃をかけようと右手の中にテニスボール大の火球を作りだす。手のひらに作りだされた火球を見たミコキが、悠生を守るために一人の間に割つて入る。

「……っ！ まあお前から殺つてやるつかアー！」

割つて入つたミコキにもトモヤは動搖を見せない。それどころか、さらに獰猛な表情を見せたほどだ。

作りだした火球を悠生に対してではなく、ミコキに對して放つ。その火球は鳥が飛ぶような速さでミコキへと一直線に飛んでくる。自身へと飛んでくる火球をミコキは風で押し返そうと、手のひらから風を作りだす。しかし、火球はその風に煽られて、さらに肥大化していく。

「……っ！？」

自身が放つた風が火球を押し返すどころか、火球への助力になつたことにミコキは驚いて身動きが固まる。

「ミコキ　っ！」

飛んできている火球をかわすための行動が出来ないでいるミコキを、タクヤは横つ跳びで地面へと押し倒すことで回避させた。地面へと倒れたその一人の上を肥大化した火球が飛んでいく。

「あ、ありがと、タクヤ」

「意識を集中しろよな。ぼうっとしてるんじゃないよ！」

火球を自力でかわすことが出来なかつたミコキにタクヤは叱咤した。それは戦闘の意識が低いミコキの意識を取り戻させる。

「い、ごめん……」

「謝つてる場合じゃないだろ！」

さらにタクヤはミコキに対して激しく言った。その言葉を受けたミコキは眼に力を取り戻して、もう一度トモヤを睨む。

「『風』系の『覚醒者』か？」

そのやり取りをじっと見つめていたトモヤは言葉遣いから受けれる印象とは打って変わって、冷静にミコキの力を分析していた。そしてミコキの力を『風』系のものと判断した。

（『風』の力はやっかいじゃない。コウキの前に立ちはだかるなら、すぐ殺して）

そのように考えたトモヤだが、その考えに反してミコキは全く別の行動を取る。

悠生を守るためにトモヤの前に立ちはだかるのは同じだったが、その口から出た言葉はトモヤにとって意外なものだった。

「……」

眼に力を取り戻したミコキはそのままついて、一人でトモヤの前に立つたのだ。

「でも……」

ミコキの力強い言葉でも、悠生は逡巡してしまった。『炎』系の『覚醒者』であるトモヤが強いことは悠生にも分かる。そのトモヤをミコキ一人で戦わせることに罪悪感を抱いているのだ。

「いいから！ 先に行つて　っ」

そう言つて、ミコキは身体全体で風を生み出し、周囲の炎の熱を利用して上昇気流を作りあげる。

「……？」

(ミコキをここから逃がすつもりか　つー)

ミコキの行動の真意に気が付いたトモヤは、させまじとミコキに突撃を行うが、それもトモヤが作った炎の壁と同様にミコキが作った龍巻の壁に阻まれる。

「くそ　つーー」

龍巻の壁に阻まれたトモヤは、その先にいるミコキを強く睨みつけ。しかしミコキは涼しい顔をしているだけだ。

「いいんだな？」

そのミコキの言葉を聞いたタクヤは確認の言葉を告げた。

「うん。今大事なことは何か分かつてるでしょ？」

「わかった」

強いミコキの意思を確認してタクヤは任せろ、と頷いた。そして、ミコキが作りだした上昇気流に乗る。

「お前も来るんだよ！」

そう言って、上昇気流に乗ったタクヤは悠然と手を引いて、同じ

よつて上昇気流に無理矢理乗せる。その後をアオイも続いていく。

「「J」ちちは任せで。悠生は必ず守るから」

「うん。信じてるよ、アオイ っ！」

ミコキとアオイは固い約束を交わした。それぞれが為すべきことをしつかりと実行するために。それが、これから世界のためになると信じて疑わずに。

「ちょ……、ちょっと、あんたら 」

上昇気流に乗った後も悠生は何かを言おうと口を開くが、それすらもタクヤは無視して、上昇気流を利用して高く高く飛びあがっていく。その勢いは止まることを知らない、気付いたら半壊状態の建物の屋上まで飛びあがっていた。

「建物の屋上へ飛び移れ！！」

その高さまで上昇気流で飛びあがったことを確認したタクヤが、悠生とアオイの二人に言った。

「「J」この距離を……？」

しかし、アオイは躊躇ためらいの声を上げた。

見ると、上昇を続ける風に乗つかつている状態の悠生たちから、建物の屋上までは間に一メートル近い距離があつた。助走もなしに、その距離をジャンプすることはアオイにはあまりにも難しい。

「ぐわ……」

間にまたがる一メートルほどの距離を見て、タクヤは下唇を噛みながら、何か良い方法はないかと考える。

男であるタクヤはこの距離を飛ぶことに、それほど苦は感じていない。それは、下の状況を見つめている悠生も同じだひつ。ミコキに、悠生のことを任せろ、と言ったタクヤはここで立ち止まっているわけにはいかない。

「悠生、お前は飛べるよな?」

「え? あ、ああ……」

いきなりタクヤに聞かれた悠生は、意味が分からなりなりにも頷いた。

「それなら先に飛べ!」

頷いた悠生に、タクヤはそう言った。

「? ビハクル? ?

「先に飛んでそこに待ってる。俺がアオイを投げ飛ばすから、それをお前が受け止めるんだっ!」

そう言ったタクヤの言葉に、

「……っ! ?
「た、タクヤ……! ?」

悠生とアオイがそれぞれ驚いた。

しかし、タクヤはいたつて平然としている。アオイが無事に建物

の屋上に飛び移るにはそれしか方法がないと踏んだのだろう。

「！」のまま「！」でじっとしてゐることもできない。上昇気流は今も空へと上つていつてゐし、「！」は建物から格好の的になる。相手はあるの『覚醒者』だけじゃないんだ！「！」で迷つてゐるわけにはいかないだろ　　「

その言葉にアオイも「そうだね」と同調する。一人のその決意を聞いた悠生は、まだ決断できずにいた。

「で、でも……」「今が危険な状況だつていい加減分かれよ……「！」でぐちぐちしてゐる時間はほんとにはいんだよ」

そのような悠生に対して、タクヤがきつとく言つた。その田も次第に鋭くなつてきてゐる。

「わ、わかつたよ……」

そのタクヤの視線を受けて、悠生はしづしづといった感じで返事をした。そして、その場で勢いをつけるように大きく両手を振つて、建物の屋上へと飛び移る。

「痛つ……ー？」

なんとか建物の屋上から建物の屋上へと飛び移つた悠生は、着地の際についた両足にジーンとした痛みが走り、痛みに顔を歪めた。

その痛みに耐えた悠生は、まだ上昇気流に乗つてゐるタクヤとアオイへ振り返る。

「い、いいぞ」

「わかった。絶対にアオイを受け止めろよ。」

悠生が建物の屋上へ飛び移ったのを見て、タクヤはアオイの腰を持つて身体を持ち上げる。不意に身体を持ち上げられたアオイは恥ずかしそうに頬を赤く染めて、顔を背けている。

「上手くこくと信じてる……！」

「う、うん」

アオイの返事を聞いたタクヤは、アオイの身体を持ち上げている腕にさらに力を振り絞る。そして、ハンマー投げように大きく振りかぶつてアオイの身体を空中へと投げ飛ばす。

「き、きやあああああああ　　っ！　　！」

タクヤに投げられたアオイは、その反動から大きな悲鳴を上げた。その身体は、高さ一メートル以上はあるだろうとこの空中に投げだされている。そしてふわりとした絶叫マシンで感じる特有の浮遊感がアオイの全身を包み込む。

(こ、こ、つー)

じゅりへ向けて飛んできているアオイの身体を受け止めるために、悠生は両手を大きく開いて構えている。しかし、その足は柵もない建物の屋上ぎりぎりの所にあるため、がくがくと震えていた。

「絶対に受け止めろよ。」

その悠生の反対側で、アオイを空中へと投げ飛ばしたタクヤは大

声を上げて悠生に言つている。

一メートルほどの距離をアオイは間違いなく飛んでいる。あとは悠生が上手くアオイの身体を受け止めるだけなのだ。しかし一步でも踏み外せば、悠生もアオイも地上へ向けて真っ逆さまである。その恐怖に打ち勝て、とタクヤは暗に言つているのだ。

その声を聞いて、悠生の眼にも真剣さが宿る。その目は真っ直ぐアオイの視線へ向けられていた。

そして、アオイの身体が悠生のもとへと飛んでくる。

「ぐふ　　っ！？」

アオイの身体を受け止めた悠生は、腹部に強い衝撃を受けて息が詰まってしまう。その衝撃で力が緩みそうになるが、それも悠生は震えながら立つていて足を踏ん張ることで、なんとか踏みとどまる。いくら少女の体重でも一メートルほどの距離を飛んできているので、その衝撃はやはり大きい。その衝撃を受けた悠生の足は緩みそぐになる力を踏ん張つても、悠生の身体の重心をぐらつかせる。

「や、やば　　」

足が前後にぐらついたことに、悠生は最悪の事態を想像して蒼白した表情になつた。そこにタクヤの声が届く。

「そこで踏ん張つとけよー！」

聞こえてきたタクヤの声を悠生は意識した瞬間に、悠生の目の前に影が差す。それはタクヤの身体だった。タクヤもすぐに上昇気流から飛び移ってきたようだ。建物の屋上へ飛び移るために、上昇気流から飛んだタクヤは、建物の屋上の端でアオイを抱えたまま身体をぐらつかせている悠生を、後ろへと押し倒す。

「ぐ……！？」
「がつは」

アオイを抱えた悠生とタクヤは衝突して、そのまま建物の屋上へ倒れた。アオイとタクヤの二人が^の圧し掛かるかたちに倒れた悠生はさらに呼吸が詰まつてしまつが、地上へ落ちていくことだけは免れだ。

「はあはあ……。ほり、上手くこつたろ？」

立ち上がりながら、タクヤは結果オーライといった感じで調子良ややつに言つた。

「ま、まあそりだけど」

それにはアオイも頷くが、空中に投げだされるとこう恐怖は簡単には拭えない。建物の屋上から地上を見下ろすとかなりの高さだった。この高さで二メートルも飛んだのだと思つと身体がすくんだ。アオイとは逆に、悠生たちが無事に飛び移れたこと地上から確認したミユキは、やつた、というような笑顔を見せている。

(これで後は無事に逃げてくれるのを祈るだけ　ね)

そして、自身は田の前にいるトモヤへと視線を戻す。
そこには、

「何をやつてゐ、トモヤへーーー。」

炎の壁で囲つておきながら、みすみす悠生たちを逃がしてしまつ

たトモヤに、スピーカーの声の男が激昂した。その怒りは声の質からもはつきりと分かる。

「あ〜、うつさいなア……。逃がしちまつたのは俺が悪いが、こつちは取り込み中だ。こいつを速攻で殺してから、追いかければいいだろ？ それまではそっちが勝手においかけとけ」

その怒号を聞いても、トモヤの表情は揺らがない。田標の相手を瞬時に悠生から、ミコキに変えているのだ。

そのまま先ほどまでの獰猛さを再び見せつけてくる。

「……わかった。そいつは任せたぞ、ここで始末しろー。」「はいはい、了解したぜ」

当初の計画が上手くいかなかつたことにいらだちを見せているスピーカーの声の男を放つておいて、トモヤはミコキに対して牙をむく。

それは炎で生物を容易く殺す 人知を超えた力だ。

第一章 世界が交わった時 ？

またしても悠生は廃れた半壊状態の建物ばかりの街を走っている。絶え絶えになつている呼吸を整える暇もないほどに走り続けている。その視線は何度か走ってきた道を振り返っている。

「何度も後ろを確認しない。あなたが今心配することは自分の身の安全だけ よ」

何度も振り返っている悠生に対し、その後ろを走っているアオイが注意する。アオイのその顔はどこか焦っているようで、悠生は自分の世界の葵が見せたことのない表情だと、不謹慎にも思つてしまつた。

「でも……」

「でも、もなし。今は走ることに集中して。『ゴールなんてあるかも分からん』だから 」

アオイの、その表現の仕方に悠生は戸惑う。

「ゴール？」

「ええ。無事にゴール出来るといいね」

走りながらもアオイはニッコリと笑顔を見せる。その時、一瞬だけアオイの真剣な表情が和らぐ。

その表情を見た悠生は照れたように振り返っていた顔を再び前へと向ける。しっかりと前を見据えて、『ゴール』というただ一つの終着点へ向けて走るために。

「アオイ！ 奴らは追つてきてるのかー！？」

その一人の前を走つているタクヤは、一番後ろを走つているアオイへ大声で尋ねた。

「ちょっと待つて」

タクヤの質問に、アオイはそう答えた。そして、彼女は片目の瞼まぶたを閉じる。それがアオイの『覚醒者』としての力の発動条件なのだ。片目を閉じたアオイは視界を共有できる対象を半径三〇〇メートルの中から探し出す。

数秒後、その範囲内にいた鳥にアオイは視界共有を行う。そうすると、閉じたアオイの片目に鳥が見ている視界が映し出される。

「……追いかけてきてるっ！ 距離は正確にわかんないけど、左後方から、数は一人程度。一台の装甲車に乗ってるわ……」

鳥の視界を共有して、発見した追手の数と方角をアオイはそのままに報告した。

「ち……っ、また向こうは車かよ」

その報告を受けて、タクヤは苦いような表情で反応した。その反応は先ほどのミコキのものと同じだ。それは一人とも本気で逃げることを考えているからだ。

「向こうは車が通れる幅がある道しか通れないんだから、こっちは建物に隠れるとかは？」

走りながら逃げる道を探していくタクヤに、アオイはそう提案をした。

それは妥当な判断だ。装甲車と言え、それが整備された道であれ砂利道であれ、走れる幅がある所しか走ることはできない。その装甲車が走ることができない幅の道や建物内に逃げることは最良の手だろう。

「それしかない か……」

きょろきょろと十字路にさしかかるたびに左右の道を遠くまで見ているタクヤは、アオイの提案を受け入れる。

「なら、こっちだ！」

アオイの提案を受けたタクヤは一人を先導しながら、左の路地へと急に方向転換した。そのまま走つていぐタクヤを、悠生とアオイは必死に追いかける。

（なんで……俺、起きてから走つてばっかり……）

前を走っているタクヤを追いかけながら、悠生は再び同じような疑問を抱いた。もう一度現状の理解を求めたい悠生だが、タクヤの走る速度が速すぎるためついてくのが精一杯で尋ねることが出来ないでいた。

「はあはあはあ……つたく」

（だいたいミユキを置いてきたのだって、なんで……）

自分一人では何も決断あるいは行動できないでいる悠生は、それ

らの真意が分からぬ。それらの困惑が解けないまま、悠生は指示されたまま走つてゐる。それは、こちらの世界で目が覚めてからの悠生の状況と何ら変わつていなかつた。

それまでの大通りから左の路地へ入つたタクヤはそのまま數十メートル走つたところで、一つの建物の中へ入つていく。

「ここの建物に一時隠れるぞ」

そして、悠生とアオイに言つた。

「うん」
「わかつた」

それぞれ頷いた悠生とアオイも、タクヤに次いで建物の中へ入つていく。

悠生たちが入つた建物はかつて企業のオフィスが設けられていた複合オフィスビルのなれのはてだつた。その一階には、まだオフィスビルとしての名残のよう各階に入つてゐる企業名が書かれたインフォメーション板が廃れながらも残つていた。

「どこに隠れる?」

そのインフォメーション板を見ているタクヤにアオイが尋ねた。

「……どこかに鍵がかかってない部屋があるかもしれない。そこに身をひそめよう」

インフォメーション板を見ながら言つたタクヤは壊れたエレベーターではなく、その隣にある非常用の階段で上の階に上がつていく。その後を悠生とアオイも追いかける。

複合オフィスビルは電気が通っていないため、建物内がかなり薄暗く、太陽が昇ろうとしている街の明かりも建物内には入ってこない。この複合オフィスビルも半壊状態であり、廊下の壁はところどころ壁が剥がれ落ちていたり、廊下に瓦礫が落ちていた。そのため手探りでゆっくりと歩くしかなかつた。

(ビルがこんな状態になるなんて……)

その建物内を歩いている悠生は、悲惨な状態になつてている建物内部を見て驚いていた。悠生がいた世界ではこのような状態の建物を生で見ることはなく、地震や戦争のニュースをテレビで見ることくらいしかなかつたのだ。

一階に上がってきたタクヤは廊下を歩いているうちに見つけた一つのドアの前に立っていた。タクヤに追いついた悠生とアオイもドアの前に立つ。

「ここ」のドアが開いてる、といつよりも壊れてる。ここに隠れていよう。あまり上の階に行つても、見つかった時ビルから出るのに苦労するからな

「うん」

タクヤの言葉に一人とも賛同して、壊れたドアから部屋の中に入つていく。

その中は小企業のオフィスとして使われていたようで、機能を失つた今も様々なものが残されていた。企業の書類が無数に入つてゐるだろうファイルがまとめられているロッカーや複数並べられてゐるオフィス机も壊れて使い物にならなくなつてゐるだろ?が、そのまま残されている。

「争いが起つたときに、身一つで逃げたんだろうな……」

その状況を見て、タクヤはぼつりと呟く。その声は悠生とアオイには届かなかつた。二人ともオフィスの残骸を見て、そのまま残された椅子に腰を落としている。

「……」

その一人にタクヤは、休憩だ、と言つた。

「追つてきてる奴らが俺たちが隠れたことに気付かなければ、また出発だ。少しでも早くここからは出たほうがいい」

「う、うん」

タクヤが言つたことにアオイは頷いたが、悠生にはもやもやとした感情が依然として渦巻いていた。その感情は、冷静にこれからのこと話をしているタクヤに自然と向けられる。そのタクヤはアオイと何らかの話をしている。

（もう我慢できねえ……）

ふつふつと煮え切らない思いが滾つてきている悠生は座つていた椅子から立ち上がって、タクヤの前まで歩く。

「どうした？」

悠生の突然の行動にタクヤは不審を感じて、尋ねた。

「あんたはここから少しでも遠くに行く」としか考えてないのか！

？

「？ 」

？

？

だからどうした、とタクヤは再度尋ねる。その言葉に悠生の引鉄が引かれる。

「なんで、//コキだけを置いてきたんだよ……」

//コキだけをあの場に置いて逃げるところ手段を取ったタクヤに悠生は激昂して、タクヤの胸ぐらを掴む。

「…………」

その悠生の行動を見ても、タクヤは何も言わない。鋭い視線で睨んでいる悠生の目を真っ直ぐ見つめているだけだ。

「なんとか言つたらどうなんだよー。」

何も喋らないタクヤに悠生はさりと突つかる。その強こゝ口調でもタクヤは動じない。

「ちよ、あなた……」

その悠生を見てアオイがなんとか止めようと恐る恐る声をかけるが、それでも悠生の怒号は止まらない。

「葵は黙つてくれ。ここつの決断が氣に食わねえんだよ」

「ちよ、ちよっと」

一向に血の氣を抑えよつとしない悠生に対して、アオイはもう一度落ち着かせよつと声をかよつとするが、

「アオイ、いい」

と、タクヤがそれを止める。

「……？」

アオイはタクヤの真意が分からず、首をかしげた。アオイの言葉を遮ったタクヤは、悠生に負けないほどに鋭い視線で悠生を睨みつける。その視線を受けて、悠生の勢いもいくらか削げる。

「な、なんだよ……」

その声もタクヤの視線を受けて、少し震えている。それまでの怒号も急に熱を失つたようだ。

「俺たちがあの場に残つて、何の役になつた？」

「……え？」

ぱつりと呟いたタクヤの言葉が上手く聞き取れなくて、悠生は素つ頓狂な声をあげた。その顔からも鋭い視線が消えている。タクヤの胸ぐらを掴んでいた手も離されている。

一方で、タクヤの顔は次第に恐さを増していく。

「だから！　俺たちが残つて何が出来た！？　俺とアオイはたしかに『覚醒者』だが、戦闘向きの力じゃない！　けど、あいつは違つた……っ。お前も見ただろう！？　あいつは手から炎を出してたつ。身体中から火を吹けるんだ！！」

その言葉は止まらない。

「そんな奴相手に、何の力も持たないお前に何が出来るんだ！？」

同じ『覚醒者』の俺たちも殴り合いじゃ歯が立たないんだ！ そんな奴相手にしてるミコキの所に残つたって、俺たちはミコキの足手まといにしかなんねえんだよ つ！！！」

止まらないタクヤの言葉は窓ガラスがなくなり吹きさらしの部屋の中で響きわたる。反響しそうなほどの中声に圧倒された悠生は言葉を発することができない。

「…………」

悠生に負けず劣らず大声を出したタクヤに、悠生は何も言えなかつた。

「分かれよ！ なんでミコキが俺たちだけ先に逃がしたのか、なんで一人だけあの場に残つたのか つ。その意味も理解していない奴が、意氣がつこと言ってんじやねえ！！」

タクヤの言葉が、強く悠生の脳を揺さぶる。ミコキの思いを悠生はその全てを理解していなかつた。いや理解していないわけではない。ミコキの、必ず守る、という言葉を悠生は聞いて、悠生はミコキのことを少しばか信じている。

強い相手を前にして、一人で残つたことが理解できないのだ。

「俺もアオイも、あの場にミコキを残したこと有何とも思つてないと思うなよ ！！ 俺だつて出来るならあの場に残つて一緒に戦いたかつたさ。それが出来るならな！」

(……！)

上まらない怒号を上げているタクヤの声が震えていた。悠生は気付いた。そこにタクヤの思いが込められている。

その思いはアオイも同じなのだろう。アオイもじつと悠生を見つめている。

「私たちにはユキに、あなたを守ることを約束した。狙われているのはあなたで、一番危険なのはあなただから。その約束を反故にすることができないわ。私たちの決断も理解してほしいの」

アオイは、その思いをしつかりと言葉で伝えようとしている。その言葉を受けた悠生は俯いてしまう。

「うー、うめん……」

そして、小さく呟つた。

「分かってくれれば、それでいい。俺たちは向よりもお前を守らなければいけないんだ」

俯いた悠生に、タクヤはそう言った。

その言葉にも、アオイと同様に自身の思いを言葉で伝えようとしている意思があった。それに気付いた悠生はそれまでの自分の意識の低さあるいは理解の弱さを思い知る。それはこれから、悠生がこの世界にいるためには重要なものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9359y/>

現実世界と並行世界

2011年12月20日15時47分発行